
花妖 ~ 蒼い追憶 ~

桔梗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花妖 ～蒼い追憶～

【Nコード】

N8055V

【作者名】

桔梗

【あらすじ】

プリキュアたちの前に現れた王海由羅という少女。かれんの親友だという彼女はくるみに激しい嫉妬を抱き、憎悪へと変えてやがて暴走を始めていく！全ての鍵は、封印されたかれんの幼少の記憶にあった！はたしてかれんと由羅との関係は？そしてくるみはどう立ち向かっていくのか！？蘇った過去に、ふたりの少女が終止符を打つ！！

プロローグ

どこまでも澄み切った碧空。

太陽の光明を浴びて生い茂っていく緑葉。

蝉が元気いっぱいに鳴いている。

小さな神社のような祠が見える境内に在る大樹の根元でふたりの少女が小さなスコップで土を穴の中へ埋めている。少女はふたりとも幼く、4、5歳程度。ひとりは青の、美しく長い髪の上にリボンが結んだ白い帽子を被っている。一方もうひとりは黒く、長さも肩までといったセミロングで、上には何も被っていなかった。

「できたね、ゆうら」

「うん、かれんちゃん」

ようやく穴を埋め終わったふたりは互いに嬉しそうに微笑み合った。

「ところでゆうらは何を入れたの？」

「内緒」

「ええ〜っ、ゆうらずるい！」

「十年後のお楽しみだよ」

その時、キィィインッ、と音が響いた。見上げると、ふたりの真上を飛行機が過ぎていった。

「わあ、ヒコーキ。かれんちゃん、おつきいね！」

ゆうらと呼ばれた黒髪の少女は興奮したように両頬を少しだけ桃色に染め、ワクワクしたように言ったが、反対にかれんと呼ばれた青髪の少女は髪と同じくらい青色の瞳を哀しげにさせた。

「うん。……あのヒコーキに、おとうさんとおかあさん、乗ってるかな？」

「……かれんちゃん？」

「あ……！」

その言葉に反応し、黒髪の少女が自分のほうを見たことに気づき、

青髪の少女は思わず、しまった、と表情を見せ、慌てて笑顔を作る。「う、ごめん、ゆうら。・・・大丈夫だから」

青髪の少女はなんとか心配ないように振舞ったが、黒髪の少女は見抜いていた。

彼女が無理していることを。本当は寂しくて寂しくてたまらないことを。

分かっていたから、黒髪の少女は次の行動を取った。

ゆっくりと歩み、青髪の少女の手を優しく、そして温かく握り締めた。

「！・・・ゆうらっ」

青髪の少女が思わず彼女の顔を見ると、黒髪の少女は柔らかい笑みを浮かべたまま、こう言った。

「かれんちゃん・・・かれんちゃんにはゆうらがいるよ。ゆうらたちは、ずっとずっと、いつしよだよ」

「ゆうら・・・うん・・・うん！」

青の瞳からぼろぼろと水の粒がこぼれた。青髪の少女は相手の顔をまともに見ることができず、水の粒は次々と土の中へと消えていった。

そんな親友を見て、黒髪の少女は笑みを消すことなく、手を離すこともなく、続けて言った。

「かれんちゃん、約束しよ。十年経ったら、またここで会おうね。」

そして、ふたりだけで大切なものをいつしよに掘ろうね！

「うん・・・約束する」

「きつとだよ」

そして、ふたりの少女はお互い笑顔で小指を結んだ。

「・・・」

水無月かれんは目を覚ました。

部屋の窓からは陽の光が差し込んできている。彼女は白いシーツ

が敷かれたベッドから上半身を起こし、片目を擦った後でベッドから降り、窓を開けた。爽やかな風が入り込み、カーテンを大きく翻す。窓の外では蝉がうるさく鳴いている。入道雲さえも視界に入り、夏の青空は今日も健在だとかれんは判断した。

「・・・何だったのかしら？あの夢」

これらの光景を見て、ふとかれんはさきほど見た夢のことを思い出す。

今も鮮明に脳裏に浮かんでくる。けれど、かれんには自分が見た夢がまだ理解できていなかった。

おそらく幼少の時の記憶が夢に出てきたんだろうというのは分かる。しかし、今のかれんに夢で見たものが一つも記憶に残っていない。小さな神社がある境内も、大樹も・・・あのゆうらという黒髪の少女も。

「・・・誰だったかしら？」

そう呟き、一度は記憶を辿り始めたかれんだが、すぐにあきらめた。所詮は幼少の記憶。掘り起こすなど至難の業だろう。気にはなるが、もう「現在」という現実を迎えた以上はどうにもならない。彼女はそう決め、もう忘れようと思った。

トントン、と部屋の扉をノックする音が聞こえる。「どうぞ」とかれんが言うと、「失礼致します」と声が聞こえ、彼女の老執事・坂本が扉を開け、目を閉じ、丁寧よくお辞儀をした。

「おはようございます、かれんお嬢様。朝食の支度ができましたので呼びに参りました」

「ありがとうございます。すぐに行くわ。食堂で待ってて」

「かしこまりました」

扉を閉め、じいやが行った後でかれんは鏡台の前で寝間着パジャマを脱ぎ、着替えを始める。

そういえば、十年後って、現在いまじゃないかしら・・・？

再び夢のことが思い返されたが、かれんはすぐにそれを振り払った。

たとえ夢のことが本当にあつたことだとしても、その時の場所も相手のことも覚えていないのではどうにもならない。仕方がない。今度こそ忘れよう。

それに・・・夢のあの娘こだつて、きつと・・・きつともう覚えてないはずだわ・・・。

かれんはそう思い、着替えを済ませると、朝食を摂りに部屋を出て行った。

愛情

その日は日曜だった。

かれんは近所のスーパーに入り、ドリンクコーナーに立ち寄った。ずらっと並ぶドリンク類からお目当てのグレープジュースを見つけ、手を伸ばす。

・・・彼女の伸ばした手は、同時に横から伸びてきた誰かの手に触れた。

すぐ隣に目を移すと、見知った顔が視界に入った。

「かれん？」

「くるみ？」

かれんの一つ下に見える、紫の髪の少女・美々野くるみがその大きな瞳を少しだけ大きくして立っていた。おそらく自分も同じ表情をしていたに違いない。ふたりの少女は顔が合った途端こそ言葉が出なかったが、それも一瞬のことで、すぐにくるみが会えて嬉しいというかのような頬が幾分か紅潮した微笑みで声をかけた。

「珍しいわね、かれん一人なんて。かれんも面白い物なの？」

「え？・・・ええ。ちよつと、このグレープジュースをね。くるみは？随分と買っているみたいだけど・・・」

買い物カゴにはパン、野菜や肉類、牛乳に海鮮類といった食料品がどっさりと入っている。口に出して聞いてみたけれどもかれんには彼女が誰のために買っているのか分かっていない。一瞬カゴに目を移したくるみが無邪気な笑みを浮かべて解答を言う。

「これ？ココ様とナッツ様への夕飯の買出しよ。一応シロップの分もね」

やっぱり、とかれんは思う。同時に彼女のことを、正直に立派だな、とも感じた。

ナイトメアに滅ぼされ、さらにエターナルにも襲撃されるという二度の災厄を受けながらも奇跡の復興を遂げたパルミエ王国の現国

王を務めているココとナッツだが、同時に現代社会の勉強のために人間の姿でかれんが暮らすこの街でも時折であるが時空を超えて来訪している。その時空をひとつとびできるシロップも彼らの勤勉さにやれやれと思いつつも拒否することなく、手伝ってくれていた。当然、ふたりの国王の準お世話役であるミルクⅡ美々野くるみも、嫌々どこるかおふたりのためなら喜んで自ら手伝っている。

もちろん、国のために働きながら一方で別世界の社会への勤勉さを忘れないココとナッツも立派だし、そんなふたりに協力を惜しまないシロップだって立派だ。

けれど、かれんの目に三人よりも目の前にいる少女のほうと立派と感じるのはかれんなりに少女を鼻屑ひじきに見ているからだろうか。

まだ少女が妖精の姿だった時、彼女が熱を出して倒れるという事態が起こり、かれんが看病を行ったことがあった。その際、敵が突然の襲撃を仕掛け、かれんはボロボロになっても彼女を守るために戦った。これがきっかけで、ふたりの仲は急速に接近したと言っている。それは彼女が少女の姿に変身することが可能となつてからでも変わらず、ふたりは傍はたから見れば「姉妹」のようにも見えていた。

だから、とかれんは思う。

自分はくるみが好き。

兄弟がいない自分を「姉」のように誰よりも慕ってくれる彼女が可愛くてたまらない。

母性愛に似た感情がかれんからくるみに向けられており、くるみが誰かのために頑張る姿を見ると、彼女の何気ない行為がより立派に感じるのだ。

でも、くるみがそういう行為を取ると、かれんはほんの少しだけ寂しく感じるし、ココとナッツ、シロップのことが羨ましくも感じる。

一度でいいから、彼女が自分のためだけに動いてくれないかと。

贅沢であり、小さいが邪な心だとは分かっていた。けれどもくる

みはいっただってそのココ様ナツ様のために動いている。彼女の目はほぼ毎日ココ様ナツ様を見ていた。いつしかシロップにも気にかけるようになり始めた。それがかれんにはほんの少しだけ寂しく、悲しかった。もしかしたら、自分は三人に嫉妬しているかもしれないと思った。

が、それを告白したところでどうにもならない。好きな彼女が困惑するだけだ。それは分かりきっていた。だからかれんは言わない。これからも言うことはないだろうと、彼女は自分の気持ちを心の内に秘めた。

「かれん・・・？」

くるみが窺うような表情で名を呼び、かれんは思わずハツとした。

「え？あ、くるみ」

「どうしたの？かれん。何だか難しそうな顔をしていたけど、悩みでもあるの？」

「な、なんでもないわ。それよりもう買い物はおしまい？」

「ええ。あとはこのグレープジュースを入れるだけ」

「そう。じゃあちようどいいわ。一緒に行く？くるみ」

「うん」

またも無邪気な笑顔を見せたくるみに、やっぱり可愛い、とかれんは思った。

そして、この笑顔を永遠に失いたくない、とも。

声

「悪いわね、かれん。持ってもらえて」

「いいのよ。私もそう急いでないから」

スーパーを出てすぐに大量の食料品を両手で持つくるみを見て、かれんは片方をナッツハウスにまで運ぶことになった。歩道を並んで歩き、ふたりの少女は仲良くお喋りを楽しむ。

「それでのぞみったら、一問も問題が解けなくて・・・結局ココ様が放課後付き添うことになったの。もう、ココ様は本当にのぞみに甘いんだからっ！そう思わない？かれん」

最近、のぞみの話も多くなつたな、とかれんは思った。彼女がまだミルクだった時から喧嘩が絶えないふたりだったが、それでも戦いにおいては息の合ったコンビネーションを発揮している。それは互いが互いに長所と短所を認めているからであり、信頼している証なのだろう。毎日のように喧嘩しながら、ふたりは固い絆で結ばれているのだ。俗に言う「喧嘩するほど仲が良い」ということなのだろう。

けれど、かれんはくるみと喧嘩したことはない。だからといって、ふたりが仲が悪いということはないとは思っただけれど、ただくるみの口からのぞみの名が多く出てくるようになる、それだけふたりの絆は深まり、逆に自分は置いていかれているのではないかと被害妄想に似た不安が少しだけかれんの中で生まれてしまう。

それが・・・怖い。妹のようなくなるみの中で「かれん」という存在が消えていくのが。

とてつもなく怖い。たとえ大袈裟と言われようとも。

だから、かれんはその恐怖から免れるためにも、小さな意地悪をするのだ。

「ココも大変ね。でも、のぞみは先生になりたいという夢があるんだから、きつと応援したいのよ」

「……夢つていえば、かれんはどう？医学の勉強は進んでいるの？」

「ええ……まだまだ分からないことは多いけれど」

「そら、これであるみの中で「のぞみ」は消え、「かれん」が現れた。かれんは小さく安堵する。」

「ナツツハウスに着くまで、自分を中心としたお喋りかれんが続いてほしい。そんな小さな願いを求める自分は「悪」だろうか。」

「大丈夫！かれんなら、きつといいお医者さんになれるわ！私が言うんだから、自信を持って！」

「あ……ありがとう」

「まぶしい笑顔で励ましてくるくるみを見て、かれんはちょっとだけ胸がチクリと痛んだ。」

「くるみの中から無理やり「のぞみ」を消し、代わりに自分にスポットライトを浴びせた小さな罪悪感からだった。」

「やっぱり、自分は「悪」だったということとかかれんは思わず口角をほんの少しだけ上げた。」

「……かれんちゃん」

「蚊の鳴くような声が、かれんの足を止めた。」

「え……？」

「かれん？」

「突然止まったかれんに気づき、くるみも足を止め、不思議そうに顔を覗く。どうやら、くるみは今の声が聞こえなかったようだ。彼女が「どうしたの？」と聞くよりも早く、

「……かれんちゃん」

「!……」

「はつきりと聞こえた。確かに呼んでいる。それなのに、くるみはまたも聞こえなかったらしい。いや、この声はもしかしたらかれんだけにしか聞こえないのではないだろうか。」

「誰……？」

「かれんはそう言葉に出し、声の主に問いかける。けれども、声の

主は答えず、三度目の呼ぶ声が聞こえた。

どこか懐かしく、透き通った少女の声だった。

「誰なの？誰が呼んでいるの……？」

かれんは混乱したように目を左右させると突然、ダツ、と駆け出した。

「あ！ちよつと待つてよ、かれん！」

後からくるみが急いで追いかける。

走っている途中からも声は何度も耳に届いていた。かれんは声に誘われるかのように道を突き進んでいた。明らかにかれんが知らないはずの道だったが、それでもかれんはまるで操られたかのように視線を前方のみに向けてまっすぐ進んでいた。

やがて古びた石段を一段ずつ登っていく。最後の一段を登ったかれんは瞬間に棒立ちになった。

「待つてよ、かれん！一体どうしたって言うのよ？」

石段をひいこらせつせと登ってきたくるみもようやく最後の一段の登り終えた途端に一瞬だけ言葉を失う。

「ここつて……神社？」

ふたりの目の前に広がるのは、神社の境内のようだった。

境内の十メートル先にその神社らしい小さく古びた祠があり、近辺に時代樹なのだろうが見事な緑葉が茂った大樹が堂々と生えている。その大樹に多くの蝉が羽を懸命に鳴らしているのだろう。鳴き声がワーツと飛んできた。しかし、かれんはそんな蝉の鳴き声に目をくれず、蒼白な顔立ちで立ちすくんでいた。すかさずくるみが声を出す。

「かれん？どうしたの？ねえ、大丈夫！？」

「……どうして？」

「え？」

「夢と……同じ場所だわ！」

「え？え・・・？」

くるみにはかれんの言っている意味が分からなかった。だが、かれんはすぐに気がついた。この境内が今朝見た夢と同じ場所であることを。古びているが、間違いない。

「どうして・・・どうして？」

夢に出た場所が現実の世界にあってもおかしくはない。問題は夕イミングだ。なぜ今朝夢で見た場所が、夢から覚めてわずか数時間でかれんの目の前に突如として現れたのか。まるでかれんをこの場所へ呼んだかのように。

呼んだ・・・？そういえば・・・私を呼んだあの声は・・・？
かれんがここで重要なことに気づいた瞬間。

サク、サク、サク、サク・・・。

境内の中心に誰か少女が立っていることに気づき、少女はふたりのほうへ歩いてきた。

サク、サク、サク、サク・・・。

少女が歩くことにその足元から青紫の、星型の花が咲いて、すぐに腐り果てて枯れ、土に還っていく。

一瞬だけ「生」を受け、一瞬だけ「死」を与えられ、美しく、儂く。

確か、花の名前は桔梗というのではなかったか。秋の七草の一つだが、実際に花が咲くのは六月から九月にかけてと夏季が多い。

だが、そんな解説など今のふたりには必要なかった。歩くことに青紫の花を咲かせ、歩くことにその花を枯らし、ふたりに近づいていく少女の異様さに、かれんもくるみも動けず、視線を少女に釘付けにすることしかできなかった。

少女はふたりから少しだけ離れた位置にてようやく足を止めた。

「ひさしぶりだね、かれんちゃん」
少女はかれんをじっと見つめて、静かにほくそえんだ。
「・・・由羅ゆいらだよ」

王海由羅

由羅と名乗った少女は大体14か15歳。黒い後ろ髪が両肩に届くぐらいのセミロングだった。服装は白い上着に赤のチエツクのスカート。色こそ黒いが横浜にある港の見える丘公園で有名な赤い靴の女の子の像をまさにイメージさせるような、漆塗りの可愛い靴を履いていた。

「あなたは・・・？」

彼女の姿を見て、かれんはまたも夢の内容を思い出す。まだ幼少だった自分と遊んでいた同じくらい年齢の少女。確か、夢の中の少女も“ゆうら”と言っていた。ということは、目の前にいる彼女は夢の中の少女と同一人物なのか。

しかし、仮に彼女が同一人物であろうとそうでなかつと、いきなり「ひさしぶり」と言われてもかれんは困る。というのもかれんは彼女のことを少しも覚えていなかった。知らないと言ってもいい。無論、幼少の時に何回か一緒に遊んだことがあるかもしれないが、所詮は幼少の記憶だ。十年前の記憶などほぼ消えかかっている。とはいえ、自身は忘れていても向こうは覚えているようだ。ここは失礼がないよう、丁寧に伺うのが最低限の礼儀だろう。かれんは少女
〓 由羅に尋ねた。

「あの、失礼ですが、どちら様でしょうか・・・？」

すると、由羅は一瞬キョトンとしたような反応をし、次の瞬間、大袈裟に捲くし立てた。

「ええ！？かれんちゃん、私のこと覚えてないの？うわあ、すっごいショック！私だよ。王海由羅だよ！昔、一緒に遊んだじゃない！？」

と、フルネームで言われてもかれんはその“昔”をきれいさっぱり忘れていた。王海由羅という少女が本当にいたかどうかも記憶に残っていない。しかし、いくら覚えていないからといって、忘れま

したで済ませるのは人間として冷たい印象を相手に与えてしまう。
仕方なく、かれんは二度尋ねた。

「ごめんなさい。覚えていないの。よろしければ、もう少し詳しく・
・！・・・」

だが、かれんの台詞は途中で途切られる。突然、由羅が抱きついてきたのだ。かれんの首の後ろに手を回し、文字通り、ガツシリ、と。

あまりの「突然」にかれんも、そして隣にいたくるみも呆気に取られる。しかし、当の由羅本人は満面の笑みでかれんの身体を強く抱き締めていく。

「くうくう・・・随分とおつきくなったね、かれんちゃん！なんだか大人っぽくもなったし、こんな素敵なかれんちゃんにこうして『触る』ことができるなんて、由羅はとっても嬉しいよ！」

「ちょ・・・ちょつと、ちょつと！！」

目の前でかれんを抱き締めた由羅に対し、ようやくハツとなったくるみが少々怒りを含んだ声をかけ、ふたりの間に割り込んだ。横槍を入れてきたくるみに由羅はかれんから離れた。

「ちょつと、あなた一体何なの？かれんはあなたのことを覚えていないって言っているのよ。それなのになれなれしくかれんに抱きつかないで！」

「・・・何、あなた？」

突然由羅の眼光と口調が冷たく、刺すように変わる。その豹変にくるみは一瞬、ゾクツと背筋が凍った。眼光の鋭さを変えぬまま、由羅は言葉を続ける。

「ひよつとして、かれんちゃんの友達？へえ、可愛いね。でも、今あんたは関係ないでしょ？・・・どいて」

どん、とくるみの胸に手を当て、そう強くなく、軽くもない力で突き飛ばす。きやつ、とくるみは小さく悲鳴をあげて地面に尻を着いた。

「くるみー！」

倒れた彼女を見て、かれんが叫ぶ。ぽん、とくるみは倒れた拍子に煙を発し、ウサギのような外見に似たミルクの姿に戻った。

「わっ……！」

少女が一瞬にして全く別の生き物に変わるといふ光景に、突き飛ばした本人もさすがに目を大きくしたが、すぐにもとの大きさに戻した。

「ミルク！」

かれんが駆け寄り、小さな身体を起こす。ミルクは痛そうに上半身を擦さすって起き上がった。

「いたたた……」

「ミルク、大丈夫？」

「大……丈夫ミル。ちょっと打っただけミル」

「何？変身したり喋喋ったりするウサギ？かれんちゃん、すっごく面白い友達がいるんだね。あ、それともペットかな？」

由羅が茶化したような声でまだ親しげにかれんに言ったが、かれんが返したのは言葉でなく、キツとなった切れそうな瞳だった。

「あなた……ミルクに何をするの！ミルクに謝りなさい！」

これは予期せぬ反応だったようで、由羅はひよつと肩をすくめた。「昔から、かれんちゃんは乱暴が嫌いだったね。ごめんごめん、分かったよ。これ以上かれんちゃんを怒らせたくないし、今日はもう帰る。でもね、かれんちゃん……」

ビュツ、とつむじ風が吹いた。砂を巻き上げ、かれんもミルクも思わず目を瞑こった。風が吹く中、かれんはすぐ耳元で彼女の声を聞いた。

「また、来るから」

「……」

風が、止んだ。

目を開けた時には、境内には誰もいなかった。

頭痛

水無月邸。夜。

「それじゃあ、その王海由羅さんて人、かれんは誰なのか覚えていないのね？」

「ええ・・・たぶん、幼少の頃の知り合いだと思っただけけど」

かれんは自室の受話器で秋元こまちと話をしている。唯一の同年齢の親友だからか、相談などの話がしたくなると、かれんは決まってこまちに電話するのだ。

「でも、いくら小さい頃の記憶だからって、何回も一緒に遊んだお友達を普通は覚えているものよ。それを覚えていないなんて、かれん、少しひどいんじゃないかしら？」

「そう言われても・・・」

確かに幼い頃に一緒に遊んだかもしれない友達のことをきれいさっぱり忘れているのは人間性として最低かもしれないが、本当に覚えていないのだから仕方ない。だから、かれんは少しでも思い出そうとしているのだが、どんなに記憶の底を掘っていつても「王海由羅」の記憶は出てこないのだ。

「それにしても不思議な人ね、その由羅さんて人。まるで小説に出てきそう・・・」

「こまち？」

かれんが声をかけると、「あ」と我に返ったようなこまちの小さな声が聞こえた。小説家を夢見る彼女のことだ。きつと一瞬空想に耽っていたのだろう。

「ごめんなさい、かれん。そうね。坂本しんごさんに聞いてみたらどうかしら？」

「じいやに？」

「ええ。小さい頃からかれんに付き添っていたじいやさんなら、知ってるかもしれないわ」

「あ・・・！」

なぜそれに気づかなかったのだろう。

「確かにじいやなら知っているかもしれないわね。ありがとう、こまち。すぐ聞いてみるわ」

「ええ。それじゃあ、おやすみなさい」

「おやすみ・・・」

受話器を元の位置に置き、かれんはすぐさま老執事を訪ねに行つた。

「王海由羅様・・・ですか？」

坂本はその名を聞くと、しばし無言になったが、

「ええ・・・覚えています」

と、なぜか諦念まじりのため息を吐くような様子で返事をした。

「よかった。教えてほしいの、その人のこと。忘れているのなら、思い出してあげないと・・・」

だが、かれんはじいやの様子に気づき、口を閉ざした。老執事は眼鏡の奥で細い意味深な目で令嬢を見つめていた。彼がそんな目で自分を見つめるのは初めてだった。

「じいや・・・？」

「・・・かれんお嬢様。お嬢様がどうしてもお知りになりたいと言うのなら、私はただ従うのみでございますが」

次の瞬間、老執事は相手の心の奥底を確かめるかのようにかれんに尋ねた。

「本当によろしいのですか？かれんお嬢様」

「えっ・・・？」

かれんはじいやの言った意味が分からなかった。いや、質問自体が全然理解できなかった。「よろしいのですか？」とはどういうことなのだろう。自身の幼少の記憶に何か問題があるのだろうか。そして、その問題にかれんが触れることにじいやは危惧しているかの

ように見えた。

一体、私の幼い頃の記憶に何があるというの……？
かれんが一瞬返事に困っていると、

ズキツ……。

突然頭に痛みが生じ、かれんは手をやった。

「うっ……！」

「かれんお嬢様！」

すかさず、じいやが手を貸す。彼の手を借りてかれんは部屋に戻り始めた。その間にも痛みは激しさを増す。

何なの、この痛み……！

突然の頭痛に喘ぐと同時にかれんは意識下の領域で一瞬何かが映ったのを見た。

走る銀色の鋼鉄。巨大なコンテナ。響き渡るブレーキ音。

「ダンプ……カー？」

「かれんお嬢様……！？」

かれんは、気を失った。

かれんをベッドの上に静かに戻したじいやは再び部屋に戻ると、小さくため息を吐いた。

「かれんお嬢様……記憶が戻りつつありますか」

気を失う前のかれんの言葉。その言葉を聞いた時、じいやは一瞬息が止まった。と同時に確信たるものが出てきた。このままだと近いうちにお嬢様は封印された記憶を取り戻すであろうと。

しかし、じいやはそれを止めようとは思わないし、止める気もない。なぜなら、彼はもともとこの事態はいずれ来るだろうと予期、覚悟していた。彼にとっては来るべき時が遂に来たとただ思うに過ぎない。

ただ、問題はお嬢様だ。お嬢様が記憶を全部取り戻したとして、それを受け入れることができるのだろうか。もし耐え切れなかったら、自分はお嬢様にどう接すればいいのだろうか。じいやはそれが分からず、怖かった。だから、願えばずっと思い出さないでほしい。けれど、やはり時は来てしまった。

そもそもなぜお嬢様は突然「王海由羅」の名を聞いてきたのだろうか。じいやにとってはそれが一番の問題であり、最大の謎だった。一体、“どこから”“その名前が”出てきたのだろうか……。

「かれんお嬢様……」

じいやは自身の部屋の戸棚の奥に仕舞っておいた古い一冊のノートを取り出した。ぺら、とページ目をめくる。そこには過去の新聞記事がスクラップされていた。ぺら、ぺら、とめくり、何ページ目かで手を止める。

『五歳女児、ダンプに撥ねられ死亡』

日付は十年前の七月と出ていた。

深夜に入り、静寂に包まれたヨーロッパ風の町並み。行き交う人もほぼいなくなり、みな眠りに入る。

そんな眠りの町の中で、黒髪の少女が一人、ぽつん、と歩いていた。

外灯の明かりだけを頼りに少女が向かっていくのは……水無月邸。

巨大な城のような屋敷の前に、少女は止まり、首をちょっとだけ上に向けた。

「この町を滅茶苦茶にしたら、かれんちゃんは由羅の所に来るかな……？」

少女・王海由羅が無邪気に微笑むと、外灯に照らされたほのかな

影がぞわぞわと動き始めた。

そして、ゆらり、と煙が伸びるように何かが見えた。

敵

翌日。かれんはサンクルミール学園の生徒会室で一人残っていた。

じいやには今日も遅くなると連絡を入れ、こまちはナッツを手伝うためにのぞみたちと先に帰っている。

机の上の書類を全て目を通し、かれんは、ふう、と疲れたように息を吐いて頬杖をついた。

結局、じいやから王海由羅のことを聞くことはできなかった。あの時なぜ突然頭痛が起きたのか、そして気を失う直前に見えた映像が何だったのかも分からない。

ただ、これだけは分かる。

身体が拒絶反応を起こしたということ。

意識下の領域が自身に警告したのだということ。これ以上触れるな、と。

本当に自身の幼少の記憶に何があったのだろうか。あの由羅という少女を思い出してはいけない理由は……。

虚無を見つめたまま、かれんはしばらく動こうともしなかったが、やがて鳴り響いたチャイムにハッとなった。

仕方がない。残りは帰ってからやる。

かれんが書類を束ね、鞆の中に入れると、突然彼女の携帯……いや、携帯に似たアイテムのキュアモが鳴った。

誰だろう、とかれんがキュアモを開くと、画面にのぞみの顔が映った。

「のぞみ？」

「かれんさん、すぐ来てください。町で何かが暴れているらしいの。ココが邪悪な気配を感じるって！」

「え？どこなの？場所は」

かれんがそう声を出した途端、わずかだが一瞬彼女の立つ足場が

揺れる。そう遠くない。すぐに判断したかれんは生徒会室の窓へと走り、町のほうに目を向けた。ズン！と音とともに中央のほうで砂煙が青空へ高く昇っていくのが見えた。

「場所は分かったわ。すぐ行くから！」

「はい！」

のぞみとの通信を切り、かれんはすぐに学園を出る。そして人気がない場所で周囲に誰もいないことを確認すると、素早くキュアモのボタンを右、左、中央と押して叫んだ。

「プリキュア！メタモルフォーゼ！」

煌びやかな青の光がかれんの身体を包み、胸、腰、腕、足に集まっていく。光の中で身を任すように水球に身を包んだかれんは次の瞬間、水球が破裂するとともに「変身」^{メタモルフォーゼ}を遂げた。白と青を基調とした袖の立った二の腕までの衣装と極端に短いスカート、その下にあるスパッツ。髪はポニーテールに束ねられ、中央に赤い薔薇が付いたりボンが装着された。目を閉じたまま、ゆっくりと、優雅に地上に降りたかれんは両目を開き、両腕を構え、彼女ならではのポーズを決めてその名を口にする。

「知性の青き泉！キュアアクア！」

その名を言い終えた刹那、力強い水流が飛んだ。

町では文字通り「得体の知れない」者たちが暴れていた。

「何・・・あれ？」

「ナイトメアでも・・・エターナルでもありません」

現場へ急行したりんとうららがそう感想を漏らす。ふたりとともにその姿を見たのぞみ、こまち、くるみ、ココ、ナッツ、シロップも同意見だった（ちなみに妖精の三人は今「人間」の姿でいる）。

その姿、例えるなら人間とグロテスクな植物が融合したかのようで頭部にはこれまた直径五メートルはありそうな星型の青紫の巨大な花が花弁を限界にまで開いていて、細かな胞子を撒き散らしてい

る。腕も足も図太いツタで形成されていて、締め付けられるだけで身体の骨が粉々になりそうだ。顔は人に似るが、両目は血で塗られているのではないかと不気味に感じるほど赤く、笑窪えくぼが見える口元には噛みつかれたら皮膚の下の骨まで深く突き刺さってしまいそうな牙が禍々しく光っていた。確かにナイトメアでもエターナルでも見なかった連中だ。新たな第三の敵なのだろうか。

しかし、そんなことを深く考えている余裕は彼女たちにはない。

敵はそのツタの触手で町を破壊し、人々は逃げ惑っている。のぞみたちはキュアモを手にとると、素早くボタンを押していき、声を揃えて叫んだ。

「……プリキュア！メタモルフォーゼ！」

桃、橙、黄、緑の光が四人の少女たちを覆っていき、衣装を施していく。

のぞみは白と桃を基調にした衣装。

りんは白と橙を基調にした衣装。

うららは白と黄色を基調にした衣装。

こまちは白と緑を基調にした衣装。

光の中で「変身」メタモルフォーゼを遂げた少女たちは地に着地すると、目を開き、それぞれのポーズを決める。

「大いなる希望の力！キュアドリーム！」

「情熱の赤い炎！キュアルージュ！」

「はじめるレモンの香り！キュアレモネード！」

「安らぎの緑の大地！キュアミント！」

彼女たちが名を言い終わると同時に神々しい光が一瞬、弾けた。

四人の少女が変身し終えたのを確認し、くるみもパレットに似た形状のミルキイノートを構える。ピピピ、と備え付けの筆ペンを使って右から押していくと、くるみはちよつと上を見上げるようにして叫んだ。

「スカイローズ・トランスレイト！」

四人の少女とは違う、綺麗だけでなく力強い印象も与える青の光

がくるみの身体を包み、衣装へと形を変え始める。髪型はツインテールへ変わり、腹部が少しだけ露出したものになると、くるみは胸に手を当て、ひと撫でする。すると、唐突に胸に青い薔薇が、美しく、強く咲き誇った。「変身」^{トランスレイト}を遂げた彼女は切れ目を開き、その名を叫ぶ。

「青い薔薇は秘密の印！ミルキイローズ！」

その名を言い終わった瞬間、背景に幾分かの青い薔薇が煌くように咲き誇った。

ナイトメアもエターナルも退けた伝説の戦士・プリキュアが第三の敵を前にして堂々と立つ。凜と、強い目で相手を見据えた彼女たちはココ、ナッツ、シロップに安全地帯に避難するよう促すと、

「「「「「はあああああああつっつ！！！！」「」「」「」

一斉に地を蹴って、駆け出した。

プリキュアの登場に植物怪人も気づき、何体かが攻撃を仕掛ける。一体がまずルージユに触手を伸ばすが、

「やあっ！」

ルージユはかわし、素早く相手の懐に近寄ると、グロテスクな体に思いつきり拳をぶつけた。威力を受け、怪人の体がわずかに下がる。次にルージユは両手を胸の前で交差し、手の甲を光らせると、

「プリキュア！ファイヤーストライク！」

炎のサッカーボールを蹴り出し、大きく開いた花弁の中へ見事にゴールさせた。一瞬で炎に包まれ、消滅していく植物怪人。ルージユは「よし！」とガッツポーズをすると、次の相手へと移った。

一方でレモネードも善戦していた。敵の触手を容易にかわし、彼女も二、三体打撃を与えてひるませると、

「プリキュア！プリズムチェーン！」

光のチェーンで一気に五体をも拘束し、地上へ叩きつけた。

だが、敵だつてやられているばかりではない。残党がプリキュアたちを捕捉し、^{ロックオン}頭部の花弁から硬化した胞子の連弾を発射する。

「プリキュア！エメラルドソーサー！」

しかし、敵の攻撃は攻撃だけでなく防御も可能とするミントの緑の円盤によって全て弾かれた。

「邪悪な力を包み込む、煌く薔薇を咲かせましょう！ミルキイローズ・メタルブリザード！」

そこにミルキイミラーを構えたローズが大量の銀の花びらを飛ばし、残党を一気に一輪の巨大な銀の薔薇の中へ閉じ込めると、

「プリキュア！シューティングスター！」

桃の光で身を包んだドリームがその名の通り流星の速さで体当たりし、とどめを刺した。残党は薔薇とともに全員浄化された。

戦いは終わった。

しかし、新たな敵の出現にココとナッツは不安を隠せないようだった。

「何だったんだ、あいつらは……。今まで見たこともない連中だった」

「ああ……。何か嫌な予感がするな」

「また世界で何かが起きようとしている……。のか？」

シロップも思わず額からたらりと汗が流れる。だが、戦っている当の本人であるドリームは至ってのんきに言った。

「大丈夫大丈夫。きつと今度も何とかなるなる。私たちみーんなが力を合わせれば、きつと乗り越えられるよ」

「全くドリームは……。世の中そう甘くないのよ。少しはプリキュアとしての自覚を……」

「まあまあ、とりあえず終わったし、ここはもう帰ろう。ね？」

「賛成です。帰ってみなさんでおやつでも食べましょう」

「それもそうね。あ、ところでドリーム、かれんに連絡したほうがいいんじゃないかしら？」

ローズの説教をルージユが止め、レモネードが今日も元気に言い、ミントがふと気づいたようにドリームに声をかけると、

「あ、そーだった。かれんさんにも伝えてたんだ。もう終わりましたって、かれんさんに連絡しなきゃ……」

と、ドリームが再びキュアモを取り出した瞬間だった。ふいにローズは禍々しい「気配」を感じた。

「待って、ドリーム。まだ終わってないみたいよ」

「え・・・？」

一瞬呆けた表情をしたドリームから目を離し、ローズは背後を振り返った。ココ、ナッツ、シロップも生唾を飲み込んで、同じ方向をじっと見つめている。妖精ならではの感応が告げているのだ。まだ終わっていない、と。

「そこにいるのは誰なの！？隠れてないで出てきなさい！！」

ローズの甲高い声が空間を震わせた瞬間。

ビュッ、と旋風が巻き起こり、掻き消されるかのように風が止むとともに少女が姿を現した。その姿を見た途端、ローズは瞳孔を大きく開き、表情が凍りついたように固まった。

「あなた・・・！」

「また会ったね、喋るウサギちゃん」

王海由羅だった。

否定

王海由羅は屈託のない笑顔でプリキュアたちのほうへ歩き出した。

サク、サク、サク、サク……。

彼女が歩くことに桔梗の花が足元に一瞬で咲き誇り、

サク、サク、サク、サク……。

彼女が歩くことに一瞬で花は枯れて、土に還っていく。

由羅はプリキュアたちから少し離れた位置で笑顔を絶やさぬまま足を止めた。

「こんにちは。私、王海由羅。かれんちゃんの友達だよ」

「王海由羅？あなたが、かれんが言ってた……？」

と、ミントが言ったが、

「ちよつと、あなた！」

彼女が再び現れたことに驚いて、しばらく言葉が出なかったローズが突然怒りを含んだ声で叫んだ。

「さっきのやつら、あなたの仕業でしょ!?!」

「そうだよ」

「……………ええっ……!?!」「……………」

ローズは気づいていた。由羅が禍々しい、妖しいあや気を発していることに。とてつもない邪悪に満ち溢れて、それが怪人たちの発していたものとよく似ていることにも。きつとココたちも気づいていただろう。彼女が只の少女ではないということに。プリキュアたちは今戦ったばかりの連中が目の前にいるどこにでもいそうな普通の少女が仕向けたものであることと、それを彼女があっさり認めたことの二重の意味でびっくりしていた。ローズは彼女の言葉を聞くやい

なやさらに怒りを増した声で怒鳴る。

「あなた、一体何を考えているの？あんなやつらを町で暴れさせて！・・・うつん、それ以前にあなたは何者なの！？」

由羅はニコニコ顔のまま返答した。

「由羅が誰かは置いといて・・・由羅がこんなことしたのはね、かれんちゃんを呼ぶためだよ」

「・・・はあ？」

相手の答えにローズは思わず理解不能状態になる。いや、おそらく全員が同じ表情を浮かべていただろう。

かれんを呼ぶために怪人を暴れさせた？

全く意味不明。なぜそんな手段を取ることでかれんを呼べるのかも分からない。発想レベルが幼稚。行動能力も幼稚。とんでもない確率の問題だ。頭の中が幼稚園児にまで退化してきているのではないのか。すると、由羅は相手の心を見透かしたように問うた。

「だって、かれんちゃん、『正義の味方』やってるんでしょ？」

「・・・！！・・・」

全員息が詰まった。

彼女はかれんがプリキュアだということを知っている。一体なぜ！？今まで自分たちがプリキュアだということは周囲にバレないよう、極力避けてきたのに。

しかし、由羅は微笑んでいた口元に手をそつと当てながら続けて言った。

「かれんちゃんが『正義の味方』だったら、こんな悪いことやってたら、きつと来ると思ったんだ・・・でも、来たのはかれんちゃんじゃなくて、かれんちゃんの友達だった」

由羅は口に当てていた手を離した。

「・・・正直、ガツカリだよ」

口は笑っていないかった。由羅は目も笑わず、淡々とプリキュアたちを見つめていた。その平然とした様子に、プリキュアたちはなぜかゾクツと寒気を一瞬感じた。彼女たちを見据えていた由羅は視点

を地面に変え、冷たい声を出す。

「・・・おまえたちのせいだ」

「・・・え？」

「おまえたちが由羅からかれんちゃんを取り上げたんだ」

「な、何を言っているのよ!？」

ローズが叫んだが、彼女も由羅の変わり様に寒気を感じ、身体が震え始めていた。なぜかは分からないが、彼女は「恐怖」していた。何か、とてつもなく嫌な予感がしてたまらない。耐え切れず、逃げたいとさえ思っただのは初めてだった。

由羅がゆつくりと、顔を上げた。

瞳の奥に、冷酷な青の炎が燃えていた。

「だから、おまえたちなんか壊してやる・・・!」

「くくくくえ・・・?」「くくくく」

次の瞬間だった。

突如彼女たちの足元から図太いツタの触手が伸び、あっという間に全員を拘束したのである。

「あっ・・・!」

「くっ・・・!」

「きゃあっ・・・!」

「く・・・苦しい!」

ドリームとルージュが、レモネードとミントが身体を締めつけられ、苦しみます。ローズも触手に身体の内自由を奪われたが、

「く・・・こお・・・のっ!」

一撃で地面に巨大クレーターを作る持ち前の剛力で触手を切り裂き、彼女のみが逃れることに成功した。ローズの剛力に少し驚いたふうの由羅だったが、彼女が即座に全員の拘束を解こうとするのを見て、

「させない・・・!」

すぐに次の触手を足元から次々に生やし、攻撃を仕掛ける。なんとかかわしていくローズだが、きりがないうえに仲間に近いけない。

このままでは時間の問題と判断したローズは仲間の救出をあきらめ、標的を由羅に変えた。彼女に攻撃を仕掛けることで敵の能力を弱らせようという魂胆だった。

「はあああああつっ!!」

かけ声を飛ばし、由羅へと走っていくローズ。一瞬で彼女の懐に入った彼女は

「もらった!」

の声をあげた次の瞬間、強大なパワーが込められた鉄拳を相手の身体に強く当てた・・・はずだった。

「な・・・なんで!？」

ローズはただ愕然とするだけだった。

彼女の飛ばした鉄拳^{パンチ}。それは確かに敵の身体に激突した。しかし、彼女の鉄拳は激突した瞬間に敵の身体を「すり抜けた」のである。まるで煙に当たったかのように、ローズの握り締めた拳は由羅の胸を通って、そのまま背中へと出ていた。しばらくした後、並々ならぬ畏怖を感じてローズは瞬時に拳を引っ込める。

「あなた、一体・・・!？」

だが、彼女の愕然とした瞬間が彼女の間隙となった。即座に足元から触手が生え、ローズの身体に巻きつく。

「しまった・・・!」

必死に抵抗するも遅く、今度はそう簡単に解かれないように今度は二重三重に拘束される。さすがに剛力のローズもこれにはなす術がなくなっていた。

「プリキュア!」

ココたちも叫ぶが、彼らもすぐに触手の餌食となる。全員を自由を奪った由羅は冷たい視線を向けたまま、次に自身を囲むようにして周囲に数本の触手を生やし、先端を槍のように尖らせる。

「お、おい、まさか・・・!」

「や、やめる!」

槍型触手を見たシロップの顔が青ざめ、すぐにナッツが訴える。

だが、由羅はその先端を徐々に全員の喉へと近づけさせた。冷酷な目のまま、低く、怒りの声で言い放つ。

「壊れる、おまえたちなんか・・・!」

そして先端との距離がもう数ミリもない位置に来たその時。

「やめなさいっつ!!!!」

空間を激震させる怒りの声。全員がハツとなり、視点を一定方向に向け、声を飛ばした。

「アクア!!!」「アクア!!!」

「・・・かれんちゃん?」

全員の目に水無月かれん。知性の青き泉、キュアアクアの姿が映る。プリキュアの姿に変身した彼女は青い瞳の奥で怒りが籠ったまま、由羅を睨んでいたが、

「かれんちゃん!」

当の本人は周囲の槍型触手を消し、嬉々とした様子で満面の笑みを浮かべてアクアに駆け寄った。

「来てくれたんだね、かれんちゃん。うわぁ、それがかれんちゃんの『正義の味方』の格好?すっごくカッコいいね!由羅も着てみたいよ・・・」

「・・・みんなを離しなさい」

騒ぎ立てる由羅にアクアは怒りを押し殺した声で一言そう伝える。

由羅は「ん?」という顔をする。

「あ・・・ああ、ごめんね。すぐみんなを離してあげるから」

と言つて、念力なのか触れてもいないのにプリキュアたちの身体を解放し、触手を地の中へと潜らせた。自由となったが疲労から膝を着いてしばらく立てないでいる全員を確認し、由羅は笑顔のままアクアに振り返る。

「これでいい?かれんちゃん。他に由羅にしてほしいことない?由羅はかれんちゃんのお願いなら、なんだって聞いちゃうから 遠慮しないで言つて」

「・・・そう。じゃあ、一つだけお願いを言わせてもらつわ」

「うんうん」

「二度と、私たちの前に現れないで！」

「うんうん　・・・え？」

由羅の顔から笑顔が消えた。

「かれんちゃん・・・今何て言ったの？じよ、「冗談だよね？」

低腰でアクアを窺う由羅。しかし、アクアは怒りが消えない瞳の奥から彼女を見つめて口を開いた。

「今の私が冗談を言える状態だと本気で思う？」

「か、かれんちゃん・・・？」

「最初はあなたのことを早く思い出さなきゃと思っていたけれど、もういいわ。みんなにこんなひどいことをするあなたなんて少しも知りたくもない！」

「ま、待つて、かれんちゃん。由羅はただ・・・」

弁明しようとする由羅だったが、彼女は次のアクアの言葉に全身に衝撃を浴びた。

「あなたなんて友達でもなんでもない！ただの迷惑だわ！もう私の前に現れないで！」

「！・・・」

由羅は宙を見つめていた。かすかに開いた唇が震えている。表情は固まり、色を失っていた。何も言えない。

ぶつん、と頭の中で糸が切れる音がした。

虚空を見ていた彼女は再び視線を地面に移した。

「・・・迷惑、か。そうだよね。そんなことは分かってたよ。・・・でも」

由羅は顔を上げた。冷たい、氷の目がそこにあっただ。

「由羅がこうなったのは・・・かれんちゃんのせいだよ」

「え？」

アクアが聞き返した刹那、再び由羅の周囲に数本の槍型触手が生え始めた。さつきよりも先端は細く尖り、心臓を一突きできそうな印象を誇示している。触手に囲まれながら、冷たい目を向けて表情

が微動だにしない由羅にアクアは思わず恐怖し、後退した。

その瞬間、

「きゃああああああっ!!」

足元から触手が生え、数秒で身体を拘束した。苦悶の表情をし、身動きできない。そんなアクアを冷めた目で見つめながら由羅は言葉が続けた。

「どうしてなの？かれんちゃん。どうして由羅のことを忘れてしまったの？あんなにいっぱい遊んだじゃない？いくら十年も経ってるからって・・・ひどいよ」

そして、由羅はまだ膝を着いたままにいるプリキュアたちに振り返った。

「こいつらなの？こいつらのせいでかれんちゃんは私のことを忘れていったの？・・・じゃあ、一人一人壊していけば、かれんちゃん是我的ことを思い出す？」

「・・・なっ・・・!?!」「・・・」

由羅の発言に全員が驚愕する。由羅は一人一人の顔を見ていったが、最後にローズの顔を注視すると、

「あんだ、かれんちゃんと結構仲いいよね？まるで『きょうだい姉妹』みたいでさ。いいなあ。由羅はそこまでは行かなかったもん。あんなにくつついてて、すっごく羨ましかったよ。だからね・・・

あんだ、壊すよ」

「なっ!?!」

「ローズ!」

第一の標的ターゲットに選ばれ、ローズとアクアが叫ぶ。由羅はすぐさま触手の先端を彼女に向けた。ヤバい、とローズはなんとか立ち上がるうとするが、

「逃がさない・・・!」

すぐに足元から伸びてきた触手に三度拘束され、動けなくなる。

ドリームたちも邪魔できぬようにすぐ触手に締めつけられた。苦しむローズの喉を狙い、先端が光る。

このままではローズが・・・。

アクアは触手の中からなんとか片手を出し、力を溜め始めた。

「・・・行け！」

その言葉とともに槍型触手が伸びる。徐々にその距離は縮まっていき、目の前へと迫る。ローズは手足をバタバタさせ、有り余った力で抵抗を試みるがもう間に合わない。ローズは遂に目をぎゅっと瞑った。

ドス！ドス、ドス、ドス、ドスツ・・・。

嫌な音が響いた。

けれど、それは触手がローズの喉を貫いた音ではなかった。

「あ・・・」

「な・・・!？」

その場にいる全員が啞然となる。誰もがしばらく声を出せなかった。だがしばらくして、ローズが、由羅が、やっと声を振り絞って出した。

「あ・・・アクア・・・?」

「かれんちゃん・・・!？」

「ろ・・・ローズ・・・無事だったのね・・・」

ぼた、ぼた、と鮮血がアクアの背中から流れ、地にこぼれていく。触手はローズの喉ではなく。

彼女の前で大きく両手を広げたアクアの背中に全て突き刺さっていた。

汗が大量に流れ、本当は痛いはずなのに、苦しいはずなのに、それでも弱々しく微笑を浮かべてアクアは言った。

「よか・・・つ・・・た・・・」

触手が背中から離れると同時にアクアの身体がゆっくり、本当にゆっくりと倒れていく。

倒れている時でさえも彼女は微笑を浮かべていた。

背中から流れ、地にこぼれて溜まっていた鮮血が倒れたアクアの震動で、ぱしゃん、と音を立てて弾けた。

奪愛

ローズは目の前の光景が信じられなかった。

悪い夢だと思いたかった。

しかし、彼女の目には血まみれになった最愛の人が倒れている姿が映っている。

「あ・・・アクア？」

ローズは愛しい人の名をかすかに震えた声で呼んだ。だが彼女からの返事はない。目を閉じ、身体がぴくりとも動かず、わずかに呼吸が口から漏れているのが聞こえるだけだった。

触手が解かれた。ローズは倒れているアクアに寄り、そのまま脱力したように、すとん、と膝を着いた。べちゃ、と両手が生温かいものに触れた。見ると、今もなお背中から流れ、広がっていく赤い液体がローズの両手を染めていた。

「いや・・・嫌ああああああああつっ！！！！」

遂にローズは絶叫をあげた。同様に触手から解放されたドリームたちやココたちも啞然とした表情で立ち尽くしていた。ローズは瞳から溢れんばかりの水の粒をこぼし、アクアに抱きついた。

「アクア！アクアアアアツツ！！」

だがどんなに強く抱き締めても腕の中の彼女は目覚めない。それどころか徐々に顔色が悪くなり、呼吸回数も少なくなっていく。

「かれんちゃん・・・どうして？」

由羅もわなわなと身体が震えて、立ち竦んでいるばかりだった。

ローズに危機が迫った時、なんとか触手の中から片腕だけを出したアクアはそこから青い剣の形状をした専用のフルーレ、トルネードフルーレを召喚して自身を拘束する触手を斬り裂いて脱出、一秒でも早くローズの前に来て、身を挺して彼女を守ったのであるが、そんな解説は今の彼女たちにとってはどうでもよかった。

彼女自身、目の前の光景は想定外だった。ただかれんと仲良くし

ていたくるみを殺そうとしただけなのに、当の本人を瀕死の状態へ追い込んでしまった。由羅は瞳孔を開いたまま、少しもその場から動くことができなかった。

「う……うう……うわああああああああっつつつつつ！！！」

だが、突然の咆哮が由羅を一瞬で我に返らせた。

アクアを地に戻してゆつくりと立ち上がり、凄まじい怒りと悲しみ、そして憎悪を目に宿らせたローズが由羅に飛びかかった。

「よくも……よくも、アクアをつっ！！！」

泣きながら、滅茶苦茶に拳を繰り出す。しかし、どんなに殴つても蹴つても、ローズの打撃技は全て由羅の身体を突き抜けていくばかりだった。敵をひるませることすらできず、怒りが頂点に達したローズは吠えた。

「一体何なのよ、あんたはっ！？自分の手は汚さずに化け物を使って人を傷つけることばかりして！少しは戦やりなさいよ、この臆病者いくしなしツ！！！」

「臆病者」の件で、ピクツくだり、と由羅の眉間に少ししわが寄った。次の瞬間、彼女は初めて自らローズの打撃をかわし、懐に入ると、少しかだけ露出した腹部にそつと手を当てた。

「由羅は……臆病者いくしなしなんかじゃないっ！！！」
強力な衝撃。

一瞬でローズは煙に包まれながら吹き飛ばされ、背中から堀に激突した。

「ああああああっつ！！！」

「ローズ！」

全身に激痛が生じ、表情を歪んで身体が崩れるローズにドリームたちが駆け寄る。ドリームはローズの片腕を首の後ろに回し、彼女を支えて立ち上がらせた。

「ローズ、大丈夫？」

「大……丈夫。これ……くらい」

心配するドリームにローズが答えたその時だった。

「・・・かれんちゃんは、連れて行くよ」

ハツとなり、全員振り向く。眠っているアクアを由羅が抱擁していた。

「かれんちゃんを由羅のお家に連れて行く。由羅がかれんちゃんの怪我を治す」

「何言ってるの！？その汚い手でアクアに触らないで！」

ローズが叫ぶが、すでに風は由羅の周囲で吹き荒れ始めていた。

風が強くなつていく中、由羅はプリキュアたちを見つめた。

「このままじゃ、かれんちゃんは死んじゃう。そんなことはさせない。かれんちゃんは絶対に由羅が死なせない。・・・言っておくけど、あんた」

風に包まれる直前、由羅は最後にローズに視点を当てて呟いた。

「あんたよりずっと前からかれんちゃんは由羅といつも一緒だったんだ」

ゴオツ、と強い風がプリキュアたちを襲う。彼女たちは目を瞑り、身体が吹き飛ばされまいと踏ん張った。風はすぐに止み、全員目を開ける。由羅も、アクアも、姿はどこにもなかった。

「アクア・・・」

ローズの目から涙がまた流れ、唇を噛んだ。

「アクアあ・・・」

愛しい人を救えなかった悔しさに耐えられずに泣き続ける少女に、みな何の言葉もかけられなかった。

再生

・・・ん・・・れん・・・ちゃ・・・。

誰かの声が聞こえる。

・・・んちゃ・・・かれ・・・ちゃ・・・。

誰？あなたは、誰？

かれんちゃん・・・かれんちゃん・・・！

かれんはゆつくりと目を開いた。

そこは、美しい世界だった。一面の青紫色の桔梗の花が咲き乱れている。かれんはその花畑の中で横たわっていた。

「ここ・・・は？」

どこだろう。かれんはわずかに目を動かした。彼女の青の瞳に焼け跡のような巨大な屋敷が映った。もう廃墟状態になってから何年も使用してないのだろう。窓ガラスが全て割れてほぼ潰れかけ、^グ幽霊屋敷同然となっている。当然人など住んでいそうにないし、住めそうにない。

「あれは・・・？」

だがかれんはその幽霊屋敷にどこか見覚えがあった。思い出せないが、どうも気にかかる。ずっと前に見たところか来たことさえあるような・・・。

「由羅の家だよ」

声が聞こえた。すぐにかれんの視界に王海由羅が現れた。

「あなた・・・！」

由羅の登場にかれんは即座に上半身を起こそうとしたが、

「ダメだよ、もう少し寝てなきや・・・」

すぐに由羅に押し倒された。再び横になったかれんの前髪を由羅は愛しく片手で撫でた。

「怪我させてごめんね、かれんちゃん。でもここでしばらく眠って

いたら、怪我はちゃんと治るから」

「怪我・・・？」

そういえば、ローズを庇った時に受けた激痛が今は微塵にも感じない。それどころか、こうして花畑の中で寝転がることでなぜだか分からないが、全身が気持ちよさに包まれ、とても心地よかった。

「かれんちゃん、ここ由羅の家の庭だよ。かれんちゃんのために由羅が桔梗の花畑をいっぱい咲かせたんだ。かれんちゃんも何回も遊びに来てくれたじゃん・・・」

そう言つと、由羅はかれんにぐつと顔を近づけ、泣きそうな目で問うた。

「ねえ・・・それなのにまだ思い出せないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな顔で迫られると困る。かれんはつい目を逸らした。

かれんだつてできれば思い出したい。けれどどうしても思い出せないのだ。それに深く思い出そうとするとまた頭痛に見舞われるような気がしていた。これ以上は知ってはならないと彼女の中の何か自身が警告をしている。知りたいと思いつつも、無理が押し通らない現状にかれんは苦悩していた。

「・・・・・・・・・・はあ」

由羅はかれんが目を逸らした後もしばらくかれんからの返事を待っていたが、いくら待ってもこちらを見ようとしない彼女に失望したように小さくため息を吐き、彼女から離れようとした。

ふと、かれんの耳に何かが聞こえた。それは救急車のサイレンだった。屋敷の近くに公道があるらしい。ふたりのいる位置からは影も形も見えないが、その白塗りの車は赤の非常灯を回して鳴らしながら現場へと急行していく。サイレンは徐々に小さくなっていったが、由羅は気づいていた。救急車のサイレンが響いた途端にかれんの表情が変化していたことに。

彼女の表情は固まっていた。視点は定まっていなかった。酸素を求めて喘ぐように唇がぱくぱくと動いている。もしこの状態で立た

せていたら、きつと硬直したような棒立ちになっていたに違いない。

「あの時」も、救急車が来ていた・・・サイレンを鳴らして・・・

「かれんちゃん・・・？」

由羅が訝しげに名前を呼んだ刹那。

「う・・・ああああああああああああああっつつつつ！！！」

突如かれんは頭部を両手で抑え、苦悶の表情のまま絶叫し、両足を激しく上下させた。頭に、とてつもない激痛が襲いかかったのだ。

「ああ・・・ああああああああっ！！！」

「かれんちゃん！大丈夫！？」

突然の事態に急いでかれんに寄り、由羅が呼びかける。

視界が真っ白に染まった。

その「白」の世界に幾多の映像が次々に飛び込んだ。かれんはそれらの映像を見て、両目を限界にまで開いた。

やがて頭痛は治まり、かれんは汗が大量に溜まった額に手を当て、はっ、はっ、と呼吸を何回も繰り返した。表情から血の気が引いて、蒼白になっていく。何か得体の知れないものに取り憑かれたような愕然とした顔。

一体かれんに何が起こった？

由羅は訳が分からず、ただ驚いた表情でしばらく見つめていたが、呼吸回数が少なくなってきたのに気づいてようやく声をかけた。

「か・・・かれんちゃん、大丈夫？どうしたの？」

かれんは視点をようやく由羅に戻した。

「全部・・・」

「全部？」

「思い出した・・・」 “ゆづら” 「」

核心

「それではかれんお嬢様は今日は秋元様のお家にお泊りになれると？」

「そ、そうなの。生徒会のお仕事が結構残っちゃったみたいで、私
の家でやることになったの・・・」

日が暮れ始め、こまちはナッツハウスから水無月邸に急いで連絡をし、適当な嘘を述べてごまかした。瀕死の状態に陥り、しかも連れ去られたとはとても言えまい。とりあえず、こつもつともな理由を伝えておけば、老執事も訝しげに思うことはないだろう。

「だから、じいやさんはゆっくりしててください」

「左様でございますか。かれんお嬢様が秋元様のお家にいらっしやるのでしたら、私も安心でございます。どうか、お嬢様をお願い致します」

受話器の向こうでじいやは微笑みながら通信を切ろうとしたが、

「じいやさん、ちょっと待って」

「はい？」

こまちの声に気づき、すぐに受話器を耳に戻した。

「じいやさん、ちょっと聞いてもいいかしら？」

「何でございますよう？」

すると、受話器から軽い深呼吸が聞こえ、

「王海由羅さんを、御存知ですか？」

「！・・・」

その名が聞こえた途端にじいやは声を失った。

「秋元様、そのお名前をどこで・・・？」

約十秒してようやくじいやが疑問を口にする。すぐに返事は受話器から返ってきた。

「かれんから聞いたの。昔のお友達みたいね。でも、かれんはその娘このことが思い出せないみたいで、それでじいやさんなら覚えてい

るかもしれないと思って……」

「……………」

長い沈黙が流れた。

こまちは受話器の向こうで無言で苦悶するじいやの姿を想像した。どうしてそんなに躊躇うのだろう？やはり、由羅という少女は只の人間ではないのだろうか。

そう思っていると、受話器から彼の小さい、あきらめにも似たため息が聞こえた。こまちはすぐに声をかけた。

「じいやさん？」

「分かりました、秋元様。全てお話ししましょう。……ですが、一つだけお願いがあります」

「何……でしょうか？」

「……どうか、私がこれから話すことをかれんお嬢様には決して話さないでいただきたいのです」

「えっ、それはどうして？」

「かれんお嬢様の為を思っているからです。私が話さなくてもいいれお嬢様は失いかけていた記憶を取り戻すでしょう。しかし、どなたかが伝えて思い出すよりはお嬢様自ら何かの拍子で思い出したほうがまだよろしいのではないかと私は思うのです。もちろん、これは私の勝手なエゴでございますが……秋元様、私とお約束していただけますか？」

「……………分かったわ。かれんには絶対に話さないと約束するわ」「ありがとうございます。それではお話致しましょう、かれんお嬢様と王海由羅様のことを……」

それからの老執事の話にこまちの声が一オクターブ上がった。

「こまちさん……！」

水無月邸への連絡から戻り、二階への階段を登り始めたこまちに気づき、りんが声をかけた。二階に到着し、全員存在を見回った

こまちは一人足りないことに気づく。

「くるみさんは・・・？」

「湖にいる。しばらく一人になりたいんだとさ。さすがに今回ばかりはよほど応えたみたいだ」

こまちの質問に少年姿のシロップが答える。

「それにしてもこまちさん、電話、随分と長かったですね」

「うららが指摘すると、こまちはその理由をみなに伝えた。

「実はじいやさんから聞いてきたの。由羅さんのことを・・・」

「本当ですか？一体誰なんです！？」

「私も知りたいっ！かれんさんとは一体どういう関係なんですか！？」

「ふ、ふたりとも、ちょっと離れて・・・！」

すかさず顔を近づけてきたりんとのもにこまちは小さく悲鳴をあげ、我に返ったふたりはいそいそと彼女から離れた。額の汗を拭い、こまちは小さく息を吐く。

「ふう。それじゃあ話すけれど、ただ、その前に・・・りんさん、

あなたは本当に聞いて大丈夫なのかしら？」

「え？どういうことですか？」

途端にぼかんとするりん。至極当然の反応にこまちは少々困った表情になる。

「その・・・何と言ったらいいのかしら？つまり・・・」

しどろもどろでジェスチャーし、なんとか遠まわしに伝えようと努力するが、困難のようだ。そんなこまちを見て、りんは一瞬呆けた表情を引き締めて言った。

「こまちさん・・・」

「はい？」

「こまちさんが何を話そうとしているのかは分かりませんが、私もかれんさんをさらったあの少女のことを知りたいんです。だから話してください。よく分かりませんけれど、私頑張りますから・・・」

至極真面目な目で訴えるりん。こまちはその橙の瞳の奥で彼女の

「決意」と「覚悟」を読んだ。彼女も表情を引き締め、話す「覚悟」を決める。

「分かったわ、りんさん。りんさんがそう言うのなら、話すわ・・・」

ナッツハウスの目の前に存在する広い湖。その湖の畔に美々野くるみ。ミルクはしょんぼりとした様子で座り込んでいた。

その瞳は何も見ていなかった。大きな両耳も何も聞こえていなかった。

ただただ、彼女の中にあるのは、愛しい人を目の前で奪われた喪失感と悲しみ、後悔。

「かれん・・・」

ミルクは愛しい人の名を呟いた。

けれども、その人は彼女のそばにはいない。もしかしたら、もう会えないかもしれない。世界を繋ぐというプリズムフラワーの消失とともに一度離ればなれになった時のように・・・。

それでもミルクはその名を言い続けた。何度も何度も。

やがて小さな瞳からとうとう水の粒がぼろぼろとこぼれ始める。

それが頬を伝って地に流れた時、湖の底で墨汁のように黒い何か次第に大きくなり、水面に広がり始めたのを彼女は気づかなかつた。

封印された過去

王海由羅。当時5歳。

彼女は王海財閥のたった一人の愛娘である。

王海財閥は当時大手金融業界を牛耳るほどの権力を持ち、数多くの財閥とも取引を行い、信頼を深めていった。水無月財閥もその中の一つである。しかし、取引を進めていくうちに互いに好感度が上がり、遂に「信頼」を超えた「親愛」関係が生まれ、双方は徐々に交遊を深めていく。

かれんとの出会いはまだ彼女の両親が世界中を旅する前に始まる。水無月邸にて開かれた晩餐会パーティに王海家が招待されたのだ。家族とともに水無月邸を訪れた由羅はそこで同じ年齢のかれんと初めて出会った。しかし、すぐそう簡単にふたりは親友になつたわけではない。無邪気で元気がとりえの由羅はまだ友という存在が少なかつたかれんにとっては苦手なタイプだった。だから由羅が話しかけても短く受け答えするだけで進展せず、その日は終わった。だが、由羅はかれんのことをいたく気に入ったらしく、その後もちよくちよく水無月邸を訪れ、彼女に会いに行った。かれんの両親やじいやは娘に友達ができたと思つて喜んでいたが、かれんは頼んでもいないのに何度も凶々しく来る由羅を正直鬱陶しいと感じていた。

しかし、そんなふたりに転機が訪れた。言うまでもなく、かれんの両親が旅立つたことだった。

空港では気丈に振舞つて両親を見送つたかれんだったが、家に戻るなりすぐに自室で泣き出した。誰にも会いたくないと言い張り、その日は食事も喉を通らなかつた。お嬢様の気持ちが分かるゆえにじいやもどう対処すればよいのか分からず、ただ佇むしかできなかった。由羅が両親のいなくなつたかれんを初めて訪れたのはその翌日だった。

当初じいやはお嬢様を気遣つて今日はお引取り願うよう由羅に伝

えたが、彼女は聞かずにすぐかれんの部屋を訪れた。突然部屋に入ってきた由羅にかれんは驚き、すぐに目頭に涙を溜めて即座に出て行くように叫んだが、由羅は静止するような目でかれんを見つめて言った。

「かれんちゃん、我慢しなくていいよ。いくらでも怒って。由羅でよければ聞いてあげるから・・・」

その言葉に、その台詞に心打たれてかれんはまだ溜まっていたものを全て泣きながら吐き出した。

お父様もお母様も大っ嫌い！私をひとりぼっちにして！なんでなんで私を連れてつてくれなかったの！う・・・うつ・・・なんなの一体！？こんな私、嫌。こんなこと言いたかったんじゃないのに・・・っ。

泣き止まないかれんを由羅は優しく抱き締めた。

「かれんちゃん・・・いいんだよ。言いたいことがあつたら、はっきり言つても。これからは由羅がかれんちゃんと一緒にいるから。だから・・・友達になる？」

そう言つてくれた由羅の腕の中でかれんはまた泣いた。

嬉しかった。友達もなく、両親もいなくなった自分に友達になるうと言つてくれた由羅の存在が。

いつの間にか彼女への苦手意識は消え、由羅はかれんにとって心の癒しとなつてくれた。

この日を機に、ふたりは「親友」となった。

「由羅様はかれんお嬢様にとって、本当に良きお友達でございました。かれんお嬢様の大好きな桔梗の花をよく持って来てくださり、由羅様がいらつしやっただけでお嬢様は笑顔を見せてくださいました。・・・しかし、それも束の間の時間で終わったのです」

「何か・・・あつたんですか？」

受話器を耳に当てながら、こまちはじいやに尋ねた。じいやはしばらく無言でいたが、やがて絞り出すように言った。

「由羅様は……お亡くなりました。かれんお嬢様の目の前で」

「え……!?!」

由羅は死んだ。交通事故だった。

原因は運転手の前方不注意。由羅はダンプカーという巨大な鋼鉄の塊に撥ね飛ばされ、病院先で息を引き取るという悲惨な最期だった。享年5歳。

その時の瞬間を、じいやとともにいたかれんは一部始終を見ていた。彼女が轢かれた時も救急車に運ばれた時も見ていることしかできなかつた。

あんなに元気で無邪気に笑い、走り回っていた由羅は一瞬でもの言わぬ身体になつた。

いや……嫌……!!

いやあああああああああああああああああああああああああああつつつつ!!!

かれんは愕然としたまま両手で顔を？んで絶叫し、気を失つた。

「死んだ……?」

「ええ」

「じゃあまさか、私たちの前に現れた由羅さんって、ゆ、ゆ、ゆゆゆゆゆゆ……」

「幽霊、てことになるよな」

「ぎゃああああああああつっ!!それを言うなあつ!!」

冷静に言ってしまったシロップにりんは一際高い声で怒鳴ると、即座に両腕で身体を抱き締めガタガタ震えだした。体力では男勝りなりんだが、オバケやユーレイといった類が弱点たぐいというやはり乙女なトコロもある。しかし、それがまた彼女の可愛いトコロだった。

やっぱり大丈夫じゃなつたかとりんの様子を見て、こまちは少々

呆れ笑いしたが、すぐに目の色をもとの真剣さに戻して言った。

「みんな聞いて。ここからが本題なの」

「……え？」

「かれんが由羅さんを忘れてしまったのは、事故の直前にかれんが由羅さんにしてしまったちよつとした行為が原因かもしれないの・

」

事故が起きる数分前、かれんと由羅が会ったのは偶然だった。

じいやと散歩に出かけていたかれんはふと通りの向こうを歩く由羅の姿を見つけた。そして彼女の名を呼んで、手を振った。……それが彼女のちよつとした行為だった。

名前を呼ばれ、手を振っているかれんの姿を見かけた途端、由羅はすぐさま信号が青の横断歩道を渡り……一瞬で姿が変わり果てた。

親友の死を目の前で見て絶叫をあげ、気絶したかれんはじいやの手によつてすぐに屋敷に戻され、しばらくベッドで眠った。目を覚ました時、じいやが由羅の死を伝えようとすると、かれんはキョトンとした表情でこう言ったという。

「ゆづらつて、誰？じいや」

じいやは驚き、彼女とともに遊んだ日々を話したが、かれんは本当に由羅のことを覚えていないようだった。おそらく、5歳の少女にとつては事故の衝撃はあまりにも残酷に強すぎて耐え切れず、自身を守るためのかれんの中にある一種の防衛措置が働いたのだろう。かれんの中で「王海由羅」という少女との記憶は最初からなかったこととして封印された。老執事はこの事態を彼女の両親に伝えておいたが、先方は王海家には悪いと思うが娘はそのままにしておいたほうがいい、名前を呼び手を振ったことが親友の死に繋がってしまったと思ひ出したら娘は発狂しかねない、いつか思ひ出す時が来るまでじいやも迂闊に思ひ出させないようにしてくれ、王海家には私

たちが連絡をよこすと国際電話で命じ、老執事もそれに従った。こうしてかれんは自ら封印した記憶を思い出すことなく成長していき、現在に至る。

「まさか、かれんの過去にそんなことがあったなんて・・・」

人間世界では小々田コージと名乗るココが神妙な表情で呟く。同様に青年姿のナツツも言葉を発した。

「ああ。なんだかやるせないな」

「こまちさん、由羅さんのお父さんとお母さんはそれからどうしたか知ってますか？」

のぞみの疑問にこまちは答えた。

「由羅さんの死後以降は心の傷を癒すために田舎のほうへ引っ越したと風の便りで聞いたみたいだけど、よく分からないらしいの。由羅さんが死んでから、水無月財閥ともあまり関係を保つことがなかったみたいだから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

仕方がないとはいえ、やはりやるせないさが全員の心に残った。

確かにかれんが由羅の名前を呼び、手を振らなければ、彼女は事故に遭わなかったかもしれない。だが悪く言えば横断する前に車両が近づいていなかったかを確認しなかった由羅にも非はあると思うし、何よりも歩行者信号は青だったにも関わらず、前方不注意で事故を起こし、由羅を死なせた運転手が一番悪いだろう。当然運転手は逮捕され、刑務所行きになっただろう。

しかし、誰が悪いか悪くないか討論しても時間の無駄なのは明らかはずだ。そんなことをしても由羅は帰ってこない。死んだ人間は生き返らないはずなのだ。誰が悪いか悪くないかと問われれば、誰もが悪いし、誰も悪くないのだろう。

ただ、今ここで問題となっているのは死んだはずの由羅が現れたということだ。彼女は本当に幽霊なのだろうか。

「でもなあ、仮に幽霊だとしてもそいつ5歳の時に死んだんだろ？
ただ俺たちの前に現れたあいつは中学生みたいだったじゃないか。
それにあの怪人や触手を操る力・・・幽霊にそんなことできるのか
？」

シロツプが首をかしげながらもつともな疑問を口にすると、

「ただの『幽霊』・・・ならな」

と、ナッツが意味深なことを呟いた。すかさず全員が彼に注目し、
うららが聞いた。

「ナッツ、それって、どういうことですか？」

「王海由羅からはとてつもない邪悪な気を感じた。これは俺の想像
だが、彼女がまだただの『幽霊』だった時に彼女の中で親友かれんからも
忘れられた悲しみが怒りに変わっていき、少しずつ陰マイナスの力を集め始
めたんじゃないかと思う。何しろ死んでから十年だ。時間は十分あ
る。そして今、その邪悪な力が頂点にまで達し、彼女は心身とも
に強大な『悪霊』へと姿を変えた・・・とすれば彼女にそのような能
力があつても不思議はない」

「悪霊・・・」

ごくつ、とりんは唾を飲み込んだ。

確かに由羅がすでにこの世の人でないのなら、常人では考えられ
ない力を発揮する彼女は人を捨てた悪霊と呼べるかもしれない。そ
んな存在すら否定してしまいそんな敵を相手に自分たちはどう対処
すればいいのだろうか。

「由羅さんはかれんさんに復讐する気なの？忘れられたことを怒っ
て・・・」

のぞみが聞くと、ナッツは「それはないな」と答えた。

「確かに怒りは感じているかもしれないが、俺からしてみれば王海
由羅はかれんを憎んでいるようには見えなかった。むしろ、どちら
かというと彼女が憎んでいるのは・・・」

ナッツは一度口を嚙み、すぐに開いた。

「ミルクだ」

暴走

青紫の花畑の中で、かれんは全てを思い出した。

由羅と遊んだ日々。由羅が死んだ日。

目の前にいる由羅が幽霊かどうかなんて少しも疑っていなかった。

記憶が蘇ったかれんにとって、目も、鼻も、口も、髪も、頬も、

声も、全てが彼女の中で蘇った「王海由羅」を示していた。

「由羅………」

かれんはその名前を小さく呼んだ。由羅の表情が輝いた。

「かれんちゃん、由羅のこと、思い出してくれたんだね！」

「ええ………」

しかし、「あの時」のことも思い出していた。

自分が彼女を殺した時のことを。

「………」

「かれんちゃん？」

かれんの表情の変化に気づいて由羅が覗く。かれんは震えていた。

泣いている。目から頬を伝い、涙が流れている。それが深い深い罪

悪に迫られた表情とすぐに分かった。

「由羅……ごめんなさい」

かれんは声を絞り出すように言った。

「あの時、私があなただを呼ばなければ……ううん、せめて手を振

らなければあなたは事故に遭わずに済んだかもしれない。それだけ

じゃない。孤独から私を助けてくれて、親友になってくれたあなた

を私はずっと忘れていた。……本当にごめんなさい」

泣きながら謝り続けるかれんを由羅は静かに見つめていた。

「……かれんちゃん、由羅はね、ずっとかれんちゃんを見ていたよ。

かれんちゃんが今もお父さんとお母さんを待っていることも、学校

で頑張っていることも、お医者さんを目指していることも……」

プリキュア』とかいう正義の味方をやっていることも。由羅はそん

なかれんちゃんが大きくなっていくのが見ていて嬉しかった。でも、怖くもなかったの。かれんちゃんが大きくなっていく度にかれんちゃんの中にいる由羅が小さくなっていくのを、ううん、もしかしたらもういなくなっているんじゃないかとも思った」

言葉一つ一つが重く、かれんは黙って聞いている。由羅は話を続けた。

「由羅としか友達がいなかったかれんちゃんがいつの間にかたくさんの友達を作って、みんなからも懂れてて……今度は由羅が寂しくなってきたんだ。それがだんだん大きくなってきて、もう我慢できなくて……由羅、『また』かれんちゃんに会いに来ちゃったんだ。でも本当によかった。かれんちゃんが思い出してくれて。かれんちゃんの中にまだ由羅が残ってて……ねえ、かれんちゃん」

由羅が十年前と同じ、無邪気な笑みを向けたまま言った。

「由羅と一緒にいよう。由羅はかれんちゃんに寂しい思いなんてさせない。正義の味方やってて危ない目に遭わせないから……だから、いつまでもずっと、一緒にいよう」

「………由羅」

由羅の言葉を聞いて、かれんは、ああ、と理解した。

由羅は身体こそ中学生並みだが、中身は十年前と同じまだ5歳なのだと。

彼女は今も子供の視点で見て感じて考えている。だがそれも無理ないかもしれない。いきなり由羅は「死んだ」のだ。幽霊になってもしかばらく自分の死が理解できなかっただろう。いや、今もつきりと自覚できていないのかもしれない。だからこそ、彼女は存在すらもはつきりできないまま、かれんへの想いが日に日に大きくなって心身ともに変化していったのだろう。由羅にとっては生きている時も死んだ後もかれんだけが唯一の友達だった。だからこそ、お気に入りの玩具のように手離したくない子供のような独占欲が由羅の中を支配している。

けれども、かれんは由羅の玩具ではない。

確かに仕方なかったとはいえ、昔の親友の存在をずっと忘れていたのはかれんにも多少の非はある。その非を償えというのなら潔く償おうと思っはいる。しかし、由羅の願いを受け入れるわけにはいかない。勝手かもしれないが、あまりにも時が長すぎた。もうかれんは由羅にも負けなかけがえのない親友がいるし、何よりも医者になりたいという夢がある。まだまだやりたいことが数多く残っている。そんな自分がもう今さら引き下がるわけにはいかないのだから、かれんは返答した。

「ごめんなさい、由羅。それはできないわ」

「かれんちゃん・・・？」

由羅は驚いたように目を見張った。

「由羅も知っているとおり、私はもうひとりぼっちじゃないの。私にはもう仲間がいて、夢があつて、やりたいことがたくさんあるの。あなたをずっと忘れていたことは本当に謝るわ。でも由羅、もう分かつてほしいの。・・・あなたは、もう、死んだのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だからお願い、由羅。このままだとあなたにとつてもきつとよくないわ。勝手かもしれないけれど、分かつて。何も言わずに天国へ行って、見守つてて・・・」

由羅はただ遠い目をして黙っていた。かれんは固唾を飲んで彼女の出方を待った。

やがて由羅は口を開いた。

「・・・・・・・・かれんちゃんは、もう由羅のこと、いらないの？」

「！・・・そうじゃないわ！私はただ・・・」

「由羅よりも・・・あいつのほうがいいの？あの喋るウサギちゃんのほうが・・・」

「ミルクは関係ないわ！私はこのままだとあなたもいけないと思つて・・・」

「嘘だ！・・・！」

由羅の声が大気を震わせた。その咆哮に、かれんはビクツとなり、一瞬で言葉が出なくなつた。

今や由羅は本気で怒っている。表情はさっきまでの笑顔はどこへやら凍りついたようで眉間にはしわが寄せ、こめかみがピクピクしている。眼光は鋭く光り、次に口から出た声は低くなつていた。

「かれんちゃんは嘔吐している！かれんちゃんはもう由羅はいらないんだ！由羅よりもずっと仲良しの喋つたり、変身したりするウサギちゃんのほうが・・・っ！許さない許さない許さないっ！あんなウサギ、由羅が壊してやるっ！！」

「や・・・やめて！ミルクに手を出さないで、由羅！！」

遂に上半身を起こし、かれんが由羅の身体にしがみつく。かれんは必死で懇願する目で訴えた。

「確かにそうよ！私にとつて、ミルクは大切な存在よ。でも、由羅がいらぬわけじゃない！お願い。ミルクには手を出さないで・・・」

だがかれんの必死の訴えを聞いても由羅は目の色を変えなかつた。それどころか、さらにその瞳に憎悪を燃え上がらせて、しがみつくかれんを上から見下ろしていた。そんなにあいつが大切なのかと問うかのよう。

「・・・いいよ、かれんちゃん。かれんちゃんが言うなら、由羅は手を出さない。“由羅は”ね」

「え・・・？」

かれんは目を上げ、由羅の顔を見た。由羅は冷酷な表情のまま、かれんを見つめると、

「その代わり、かれんちゃんがウサギちゃんを壊してよ・・・！」
次の瞬間、由羅の片手に黒々とした凄まじい邪気が集まつたかと思つと、それが一気にかれんの全身に浴びせられた。

「きゃああああああああああああああっつつつつ！

！！！！」

身体中に陰の要素が凄スピードで駆け巡り、全てを侵していく。

やがてかれんは全身を闇の中に呑み込まれた。
闇に呑み込まれる一瞬、彼女の青い瞳と髪が、漆黒に染まった。

招待

湖の畔でミルクは今もなお泣き続けていた。瞳からぼろぼろと涙は止まらず、土に消えていく。どんなに泣いたってどうしようもないと分かっているにも、彼女は己の弱さを誰にも見せず一人で泣き続けた。

日が暮れて、辺りが暗くなっても鳴き止もうとしない蝉の音が、しん、と途絶える。風も吹いてなく、異様に静寂な空間がその場を支配した。そして……。

ゴボ……ゴボゴボツ……。

目の前の湖で気泡が激しく噴き上がる。それは次第に激しさを増し、ミルクはハッと泣き止んで湖に目を移した。

ザザーッ！

湖から水柱が一瞬立ったと思うと、中から誰かが姿を見せる。

「やつほー、ウサギちゃん」

「!……」

その姿、その台詞にミルクは声が出なかった。そんな妖精の反応に湖から現れた誰かはいたく愉快そうに笑った。

「あれ？どうしたの？もしかしてまた由羅が現れるなんて思ってもみなかった？」

王海由羅だった。自身の愛しい人を瀕死に追いやり、しかも連れ去っていった憎々しい敵。その彼女が、また自分の目の前にいる。

彼女の出現にしばし混乱していたミルクはなんとか冷静さを取り戻し、声を絞り出すようにして発した。

「今度は……何しに来たミルク!？」

「ふふっ……」

ミルクの言葉に由羅は微笑みを浮かべると、水面に足を着けた状態のまま、一步一步と前へ歩み始めた。一步前へ足が出ることに水面から桔梗が花を咲かせ、一步後ろ足が上がることに花は枯れて水

の中へ沈んでいく。由羅が少しずつ近づいてくる度にざわざわと、闇の中にひしめきあう気配がミルクの全身を震え上がらせた。冷や汗が滝のように身体を流れる。ミルクの半歩手前で足を止めた由羅は彼女を冷たい目で見下ろした。その瞳は異様な光に満ちていた。人間ではない、むしろ人間を捨てた魔物の眼差し。その目で見られただけでミルクは身体が動かなくなった。

「そう怖がらなくても大丈夫だよ。『由羅は』何もしないから。それどころか、あんたが大好きなかれんちゃんに会わせてあげようと思っただけだよ」

「どういうこと・・・ミルク？」

ミルクが彼女の言葉を理解できないでいると、由羅はさつと片腕を挙げた。直後に彼女の背後に楕円形に近い暗黒の穴が空間に開いた。ブ・ン、ブブ・ン、と穴の中からテレビのノイズのような不明瞭の音が聞こえる。これは扉だ。その扉の中に入れということなのだろうか。

「そ。この中に入れば、かれんちゃんがいる所に一気に行けるよ。心を覗いたかのように由羅が言った。だがミルクは由羅からそう聞いても容易に扉の中へ飛び込もうとしなかった。

畏だろうか。いや、絶対畏に決まっている。

数々の戦いを積んできた彼女の経験と勘がそう警告している。こゝは勝手な判断はせずに今すぐ仲間がいるナッツハウスに戻り、報告すべきだ。ミルクはそう結論に至り、くるりと背中を向けて走り出そうとしたが、

「他の友達を呼ぶつもり？言っとくけど、ここでさっさと決めないと、もうかれんちゃんとは会えないかもしれないよ。由羅はかれんちゃんを返す気はないんだから。後悔はしたくないでしょ？」

一歩踏み出したところで、再び心を見透かしたように由羅が闇の中へ誘う。ミルクは途端に振り出した一歩を引っ込めて、ゆっくりと振り返る。由羅は冷酷な表情で笑っている。振り返ったミルクはしばらく思い悩んだ表情をし、迷っていたが、

「・・・本当にかれんに会えるミル？」

「由羅は嘔吐かないよ」

「・・・」

たとえ畏だつたとしても、もう自分は引き返すことは許されない。たとえこのままでもいつまでも泣いてばかりでは状況は少しも変わりはない。ならば、少しでも愛しい人を救える可能性があるほうに賭けたほうがよいのではなからうか。

「・・・分かったミル。行くミル」

「毎度」

ミルクは決意した。愛しい人をこの手で救いに行くことを。

彼女は即座に煙を発して少女の姿に変わると、敵が開いた暗黒の扉の中へ飛び込んだ。

かれん、きつと助けるから・・・！

美々野くるみが闇の中に消えた直後、由羅も扉も一瞬で消えた。

その一部始終を目撃している者がいた。メルポだ。

伝説の花園・キュアローズガーデンにてシロップが育てた薔薇が姿を変え、親友となった彼は「メー！メー！」と慌てふためいた様子ですぐさまナツツハウスの中に戻り、階段を登ると、のぞみたちとともに話をしていた親友の胸に、いの一^{シロップ}番に飛び込んだ。

「うわっ！？メルポ？どうしたんだ、いきなり？」

親友の行為に驚くシロップにメルポは急いで今起きた出来事を伝えた。伝え終わった途端、シロップの顔が青ざめた。

「何だつて？ミルクが！？」

「ミルクがどうかしたの？」

シロップの口からミルクの名が出てきて質問するのぞみだが、彼は答えずに即座に階段を降り、外に出る。湖にミルクの姿はどこにもなかった。

「あいつ・・・！」

「シロップ!」

すぐ後ろからのぞみたちが駆けつける。彼女たちもミルクがいなくなっていることに気づいた。

「シロップ、ミルクは?」

ハッと気づいたように言ったりんにシロップは振り返ると、重い口を開いた。

「あいつ……俺たちに何も言わずに行きやがった。かれんを助けるために……!」

いつの間にか、周囲は蘇った蝉の鳴く声が響いていた。

愛憎

目を開けると、そこは花畑だった。桔梗という、青紫色の星型の花が一面に広がっている。

桔梗の花は一本一本がほのかに光っていて、夜だというのに十分周囲を見渡せる朝方に近い異様で静寂に包まれた空間を作り上げていた。

くるみはしばし目を瞬きさせて呆然と立ち尽くしていた。

「ここは・・・？」

「いらつしゃい、ウサギちゃん」

反応し、声が出た方向に視線を飛ばす。王海由羅があいかわらずのニコニコ顔で立っていた。

その有無を言わせない微笑。細く、人を見下すようなつぶらな瞳。憎いと思っている少女を目の前にしながらも悠然としているその立ち振る舞い。もともと愛する人を目の前で奪われて怒りが増しているうえにそう堂々たる姿を見せられて、くるみは無性に腹が立った。だが激情に駆られて動くほどくるみは愚かではなかった。敵は怪人や触手を生み出し、操る能力を持つ得体の知れない相手。しかもこの花畑は彼女の領域だ。^{フィールド}何を仕掛けてくるのか分からない。容易に動くよりはいつでも臨戦態勢を整えておくほうが得策だろう。くるみはそう結論を下し、身体の中から沸き上がってくる怒りを抑えてミルキイノートを取り出し、ピピピ、と筆^{ペン}で押していった。

「スカイローズ・トランスレイト！」

青の薔薇吹雪と光が目を閉じているくるみの身体を覆い、衣装を施していく。衣装がほぼ出来上がったのを確信したくるみは閉じていた両目を開けて胸をひと撫でして一輪の青の薔薇を咲かせた。

「青い薔薇は秘密の印！ミルキイローズ！」

くるみはミルキイローズに変身すると、再び由羅に鋭い視線を飛ばして叫んだ。

「かれんはどこ？どこにいるの!？」

言葉からも眼差しからも彼女が由羅に対してどえほど敵意を剥き出しにしているかが伝わる。その叫びにさすがの由羅も笑みを消し、しばらく無言で見つめていたが、やがてゆっくりと口を開けて問うた。

「・・・ねえ、あんたはかれんちゃんが好き？」

「・・・はあ？」

「答えてよ。あんたはかれんちゃんが好き？」

突然の質問にローズは一瞬呆けた表情をキツとさせて返答した。

「何言ってるの。当たり前じゃない!かれんは私にとって、一番の仲間で、恩人で、大切な人なんだからっ!！」

ローズの返事に由羅は至極納得したようにうなずいた。

「そうだよな。かれんちゃんとあんたはお姉ちゃんと妹のようにあんなに仲良しなんだもん。嫌いなわけがないよね。分かるよ。すっごく分かる。・・・だから、由羅はあんたが嫌いなんだ。あんたが由羅からかれんちゃんを奪ったから」

ズン、と空気が突然重くなった。ローズは思わず身体のバランスが崩れそうになった。

由羅はローズを刺すように見つめていた。本当にそう見つめられたらゾツとしてしまいそうなほどの冷酷な瞳で。ローズはその瞳の奥に存在しているものを見た。それは、怒りを超え、全てを破壊してしまいたいような威力を表示する氷のような冷たい「殺意」。

「あんたのせいであれんちゃんの中で少しずつ由羅が消えて、代わりにあんたがかれんちゃんが一番になっていく・・・。そんなことはさせない。もうこれ以上、あんたにかれんちゃんを好きないようにさせない。・・・でも、せめてもの情けだよ。あなたの大好きなかれんちゃんに壊されるといい・・・!!」

「え・・・どういうこと？」

ローズがそう尋ねた直後だった。

背後に人の気配を感じ、ローズは急いで振り返った。そこには・

。

「か・・・かれん！」

最愛の人が立っていた。俯いたまま立ち竦んでいた彼女にローズは即座に表情を笑顔で輝かせ、駆け寄った。

「よかった・・・無事だったのね！」

そして彼女の肩に触れようとする。だが、パシッ。

かれんは触れようとしたローズの手を片手で弾いて拒絶した。初めて受けた仕打ちにローズは驚き、少々混乱して一歩退いた。

「・・・かれん？どうしたの・・・？」

かれんはゆつくりと顔を上げた。青ではなく、漆黒で虚無の瞳がローズを捉えていた。

そしてゆつくりと、片手を挙げる。開いたキュアモがその手に握られていた。

彼女は黒の瞳をローズに向けたまま、唱え始める。

「・・・プリキュア・メタモルフォーゼ！」

瞬間、暗黒の闇と濁流がかれんの身体を覆い尽くしていく。底も見えない闇の中でかれんは流れに身を任せた。やがて闇がかれんの身体に集い、衣装へと変えていく。衣装が施し終わると、髪型がポニーテールへと変化した。

闇が消え、変身したかれんが姿を現す。その姿、形、キュアアクアと同じものだが、唯一色が違っている。知性を彩る青ではなく、邪悪な闇を表現する漆黒に、リボンに付いている薔薇も赤から黒へ、そして髪の色も墨汁をこぼしたような漆黒に染まっている。黒いアクアへと変身を遂げたかれんにローズはただただ啞然と立ち尽くしているしかなかった。

「か・・・かれん？」

ようやく、ローズがそれだけ言うと、

「あはははははっ！」

由羅が愉快そうに笑った。

「あんたの目の前にいるのはあんたの知っているかれんちゃんキユアアクアじゃないよ。邪悪な闇に呑み込まれ、全てが『凶悪』になりはてた……
・・・そうだね、『ヴァイオレント狂暴アクア』とでも呼ぼうか」

ヴァイオレント「狂暴……アクア？」

「そう……もうかれんちゃんはあんたのところへは戻ってやきやしない。もうかれんちゃんは由羅のもの。かれんちゃんは由羅の言うことしか聞かない」

「なんてことを……！？あなたかれんの友達じゃ……！」

「そうだよ。だからかれんちゃんにさせてあげてるんだ。大好きなかれんちゃんに壊されたほうがあんたも幸せでしょ？さ、かれんちゃん……彼女を滅茶苦茶コイツに壊して！」

「！……かれん！？」

振り返った瞬間、漆黒に染まったアクアの手刀がローズの眼前に迫った。

死闘

「くっ……！」

ローズは手刀をギリギリでかわした。その反動で、彼女の紫の髪の毛が四、五本犠牲になる。虚無しか瞳に映らない漆黒のアクアはすぐに手刀を引っ込めて身体を回転し、相手の腹部を狙って膝蹴りを放つ。

「うっ……ああっ！」

なんとか腕で防御したが、あまりの威力にそれは瞬時に砕かれ、わずかな隙を見つけたアクアはすかさず拳を二、三、繰り出した。最初の一手は避ける。だが、二手三手は彼女の左肩と胸に衝突した。「あああっ！」

左肩と胸に受けた痛みにもローズはひるむ。だがアクアは攻撃の手を止めない。ひるんだ相手にさらに四手五手と、追い討ちをかける。ローズはそんな彼女の繰り出す拳をかわしながら、胸が詰まる思いで愛しい人を見つめていた。

信じられなかった。これは夢だと思いたかった。

けれど、現実には確かに教えている。

自分は、今、最愛の人と戦っているということ。

あんなにも優しく、頼りになって、姉のように憧れるかれんが、何もない空洞の眼差しのまま本気で自分を殺そうとしている。たとえ彼女が「水無月かれん」の姿をした王海由羅の命令のままに動く人形だと心のどこかでは分かっているとしても、色以外一点の違いもないその容姿にやはり反撃を仕掛ける躊躇が生じる。それに人形の中にはきつと本物のかれんが今も眠っているだろう。

ならば、この望まぬ戦いを止め、愛しい人を闇から救い出すためにも、とローズは攻撃をかわしながら、必死の表情でアクアに呼びかける。

「アクア、やめて！私よ。ローズよ！」

だがアクアは攻撃の手を休めない。真横から飛んできた蹴りが防御したローズの片腕に深く入る。

「うっ・・・!!」

顔が歪み、後退つて腕を見ると、打撃を受けた箇所は赤く腫れ上がっていた。途端に

「あはははっ!」

高みの見物をしていた由羅がカラカラと笑った。

「どう?大好きなかれんちゃんにボコボコにされる気持ちは?由羅は今ものすっごくスカツとしてるよ」

その笑い、その台詞にまた腹が立ち、ローズは腫れた腕を抑えながらローズは再び彼女を睨みつけた。

「何が親友よ・・・」

「ん?」

「何が大好きなかれんちゃんよ!あなた最低よ!私を嫌うのはいいけど、その私を倒すために親友を操って戦わせるなんてどうかしてるわよ!友達にこんなことさせて、自分は手を汚さないなんて、何を考えているのよ!?今までにもたくさん敵を相手にしてきたけれど、あなたほど最低の卑怯者はなかったわ!!」

遂に怒りが限界を超えてローズは吠えた。大気がピリピリと震える。もしその場に誰かが一人でも通りかかっていたら、瞬時に聴力が身体中に危険信号を伝え、「ビクッ」という反応の動きを身体に命じただろう。それだけローズの咆哮は迫力があつた。だが、そんな彼女の叫びも由羅はせいぜい笑みが消えた程度で眉一つ動かさなかつた。

「・・・そうだね。由羅は確かに卑怯者だよ。正直、かれんちゃんにこんなことやらせたくもなかった」

やがて彼女は、ローズの言葉を肯定した。だが、すぐに「だけどね・・・」と続けた。次の瞬間、由羅の表情が再び変わった。明確な「殺意」を瞳に宿した、しかし数えきれないほどの怒りと悲しみを含んだ何かを訴える表情だつた。

「こうでもしないと、由羅はどうしても満足できないの。これぐらいあんたを滅茶苦茶にしないと・・・大切なものをなくした気持ちが本当に分かるわけじゃないじゃないっ！！」

由羅の台詞に、ローズは一瞬でハツとなった。

「・・・あなた、まさか、かれんも憎んで・・・？」

「うるさい！『いらぬ』と捨てられた気持ちなんか、あんたに分かるもんか！かれんちゃん是由羅の親友だ！あんななんかあげるもんか！狂暴アクア、今すぐ彼女をメツタメタのギツチヨンギツチヨンにぶっ壊して！！」

激情に駆られた由羅が命じると、狂暴アクアが両手を交差し、手の甲に闇を宿らせた。それは濁流となつて彼女の周囲を舞い、やがて弓矢の形へ変化していく。まさか、とローズの額に一筋の汗が流れた。

「・・・プリキュア・・・サファイアアロー！」

黒く濁った水の矢が数本放たれ、一斉にローズを襲撃した。

「きゃああああああああああっっっ！！」

激流の威力を次々に受け、ローズの悲鳴が花畑に轟いた。

ナッツハウス。

のぞみたちは全員途方に暮れていた。くるみまで姿を消してしまいい、どうすればいいのか少しも分からない。

目撃者の話から、きつとくるみは敵の本拠地へ単身で乗り込んだのだらう。かれんを助けるためにも。だがくるみ一人で大丈夫なのだろうか。相手はこの世界で存在することをも否めない悪霊。まともな攻撃などものともせず、勝負にもならない敵に容易に勝てるのは誰も思っていなかった。

助けに行きたいが、招待されたのはくるみ一人。場所が分からなければ、動こうにも動けない。だからといって簡単にあきらめたわけではなく、何か方法がないかと思案しているのだが、誰の頭にも

これといった方法は思いつかなかった。

「メ〜・・・」

よちよちと歩き、メルポがのぞみに寄り添う。のぞみはメルポに微笑み、膝の上に移動させた。直後に小さなため息が吐く。もし目撃したのがメルポでなく自分だったら、きつとくるみの身を案じて無理やりにも一緒に行っただろう、と。だとしたら、少しはくるみのそばにいてあげればよかったと、もう取り戻せぬ後悔だけが身体中を埋め尽くしていた。

「メ〜・・・」

再びメルポが声をかける。心配しているようだ。我に返ったのぞみは急いで再び微笑む。

「大丈夫。きつとかれんさんもくるみも助けてみせるから・・・」

そう言っつて、メルポの頭を優しく撫でようとして・・・
・閃いた。

「あ・・・ああーっつ！！」

突然の大声に、全員が驚いて振り向く。

「のぞみさん、どうしたんですか？」

「何かあったの？」

「のぞみ・・・？」

うらら、こまち、ココの順で尋ねるが、のぞみはただただ膝に乗っているメルポを大きな目で見つめていた。

「・・・あつた」

「はい・・・？のぞみ、何か言っつた？」

「あつたよ、りんちゃん！かれんさんとくるみの所に行く方法が！！」

に花畑にその身体を叩きつけた。

「ああっ……！」

しかも一度ならず、二度三度。ただでさえ弱っている身体にさらなる衝撃。

「あ……く……あ……やめ……て」

口端が切れ、意識が朦朧としても、それでも言葉を続けるローズ。だが最愛の人は無表情のまま身体を叩きつけた後は容赦なく蹴った。

「……か……れ……ん」

蹴られ、再び仰向けになった彼女に、アクアは胸の青薔薇を思いつきり驚？みした。

「つつ……あああああああああああああツツツツツ！！！」

今まで体験したこともない激痛に、遂に絶叫をあげる。すぐにその痛みから解放されようと胸から手を離そうとするが、攻撃で受けた疲労で力がうまく湧かない。アクアは無表情で、さらに？む手を強める。ローズは声にもならない悲鳴をあげ、ぱくぱくと、口が酸素を求めた。

「無駄だよ。かれんちゃんに、あなたの声なんて届かない。もう、あなたの所なんか戻ってこないんだよ」

きやははは、と由羅の笑う声が聞こえる。激痛に苦しみながらも彼女の言葉を聞いたローズの中に絶望が徐々に大きくなりだした。

そんな……かれんは、本当にもう戻ってこないの……？
本当に全部忘れちゃったの？

ココ様ナツツ様、のぞみやみんなと一緒に過ごした日々も。
私との思い出も全部全部……？

嫌……嫌。全部なくなるなんて……かれんとの思い出が全てなかったことにされるなんて……！

だが、アクアは無表情のままローズを少しずつ壊していく。もう視界すらも霞んできた。

か……れ……ん……

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ローズは何も言わなかった。ただ、そのままの体勢で見ているだけだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツ！」

ファイオレント

頭部から手を離して走り出し、ローズに接近していく狂暴アクア。片手に拳を作って振り上げる。鈍い音。ローズの身体が吹き飛んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

またも花畑に身体を強く打つ。だが、彼女はよるめきながらもロボロボの身体を立ち上がらせ、再びアクアに濁りのない眼差しを向けて腕を広げた。無表情に、初めて狼狽の色が浮かんだ。が、すぐにそれを振り切るように頭を激しく振ってアクアは走り出し、また拳を振り上げる。さっきよりも鈍い音。だが、ローズは今度は倒れなかった。

「・・・・・・・・」

束の間だけ表情が歪むも、すぐに振り向いて三度目の眼差しを向ける。アクアは完全に狼狽していた。空洞だった瞳も動揺し、今はただただ目の前に立つローズの姿だけが映っている。ローズは視線を変えぬまま、両腕を広げた。さあ、来るなら来いと言わんばかりに。

「う・・・・・・・・う・・・・・・・・っ！」

声が漏れた。アクアは無表情に戻すことができぬまま、右手を握り締めて拳を作り出した。ゆっくりと、それを振り上げる。ローズは目を閉じた。

「・・・・・・・・くるる・・・・み」

遂に、その名を口にした。ローズが目を開けた途端、拳を作っていた右手が、左手とともに背中に回り。

優しく。

強く。

抱き締められた。

告白

抱き締められたローズは少し驚いていたが、すぐに微笑み、同じくらしいの優しさと強さでアクアの背中に手を回して目を閉じ、抱き締める。

「かれん・・・」

ふたりの脳裏にこれまで過ごしてきた記憶が蘇る。

ともに遊んだ日。

ともに戦った日。

ともに支え合った日。

また明日も会えると信じて別れた。

ふたりだけの記憶、ふたりだけの決して壊れない絆が今、新しく繋いだ。

そして、アクアの、漆黒の衣装がもとの群青に戻っていく。髪の毛も少しずつ、青に戻り始めた。ローズはアクアの顔を覗いた。空洞ではなく、青に煌く優しげな瞳が彼女を見つめていた。

「くるみ・・・」

「かれん・・・もとに戻ったのね！」

アクアは微笑みながらうなずいた。

「ええ。おかげで助かったわ。くるみ、ありがとう」

「もう、心配かけるんだからっ！」

と、目頭にわずかに溜まっていた涙の粒を指先で拭き取るローズ。大好きな彼女が誰のためでもなく、自分のために泣いてくれたことにかれんは心から嬉しく感じていた。

心をなくしていたとはいえ、最愛の人を泣かせてしまったことに罪悪感を感じたが、それでも彼女が流した涙、「水無月かれん」のために流してくれた涙に、自分は彼女に愛されていたことに確信を得ていた。「美々野くるみ」の中で「水無月かれん」は少しも不遇に扱われていない。消えていない。置いてけぼりにされていない。

彼女の中では、昔も今も大切な人の存在は変わっていない。

変わっていたのは、むしろ自分だ。

長く、一緒にいたために自分はいつの間にか彼女のことを可愛い妹のような視点で見ている。そのせいか彼女への愛情が次第に大きくなり、独占欲が強くなり始めていた。今にしてようやく思う。自分は本当に愚かだ、と。彼女は変わらず、自分を愛していてくれたことに今頃気づくなんて。一体、自分は何を焦っていたのだろう。何を怖がっていたのだろう。どうして信じてあげられなかったのだろう。

これが罪だというのなら、自分は彼女に対してどう償えばいいだろうか。

分からない。

けれど、彼女は間違いなく、自分のために来てくれていた。

だから、今度は、自分が彼女を守る。もう泣かせないために。

「かれんちゃん……どうして？」

王海由羅が呆然とした表情で立ち尽くしていた。アクアはローズから、彼女に視線を移した。

「由羅……」

「どうして……かれんちゃん、どうして由羅より、そいつを選ぶの!？」

由羅にしてみれば全てが想定外だったといえよう。自身の人形となったかれんを以て憎たらしい少女をなぶり殺すことで、欲望を満たそうとしたが、悪霊の力を浴びたにも関わらず、かれんはくるみの力を借りて自ら邪気を撥はね飛ばし、生還した。

由羅からしてみれば全てが不愉快だった。くるみの力を借りたはいえ、かれんは由羅の人形になることを拒絶した。それ即ち、やはり自分よりもくるみのほうが大切といつかれんからの返事でもあった。

どうして？

そいつより、自分のほうがかれんちゃんのことを想う気持ちは強

い自信はあるのに……。

アクアは由羅からの疑問の意味を理解したうえで、答えた。

「大好きだから……」

「え……?」

アクアは胸に手をやり、微笑みながら瞳を閉じた。

「大好きだから……絶対に失いたくないから、私は頑張れるの。」

はつきり言うわ。由羅、私はくるみのことが好き。大が付くくらい好き」

突然の告白に少し頬を紅潮するローズ。アクアは話を続けた。

「私たちはお互い大切だと思えるくらい、深い絆で結ばれているの。」

由羅……」

瞳を開いた。

「あなたと過ごした時間が大切じゃなかったわけじゃないわ。孤独から私を救って友達になってくれたあなたには感謝しているし、あなたとの思い出も忘れてしまっただけに悪いと思っただけ。でも由羅、分かって。あなたのことがいらないんじゃない。私はもう、孤独じゃないの。私にはもう大切で、かけがえのない人たちが大勢いる。だから、もう寂しくないの。だからお願い。もう私の昔の幻影を追わないで。何も言わずに安らかに眠って……!」

アクアは自身の言葉で懸命に由羅に想いを伝えた。由羅は黙っていた。ふたりは固唾を飲んで、由羅からの返事を待った。

「……分かって……ないよ」

ようやく、由羅は呟くと、表情を変えた。怒りと悲しみが混じった、苦渋の表情だった。

「分からないよっ!結局、かれんちゃんは由羅よりそいつらのほうが大切ってことじゃん!そいつらがいるから、由羅はいらないってことじゃん!そいつらがいるから、もう由羅はいなくなっただけのことじゃん!違う!」

「ああ……」

アクアは深くため息を吐いた。

もう自分は大丈夫だよ。

もう心配する必要はないよ。

私はもう昔とは違うから。

記憶を思い出した以上、あなたのことは忘れないと約束するから。だから、幽霊になつてまで私の亡霊を追わずに空から見守つて。そう伝えたかったのだが、その想いは由羅に届かなかつたようだ。言葉にして伝えるつて、難しいと思ひながら、かれんもまた悲痛に満ちた表情で由羅を見つめた。

由羅の周辺から、凄まじい霊気が上がった。彼女の中を渦巻く怒りと悲しみの力が増幅している。

「・・・もついいよ。そんなに大切なら、ふたり仲良く由羅が壊してあげる・・・!!」

花畑の至る場所から、次々と複数の桔梗の花が盛り上がった。やがて花の塊は人間に似た容姿に形作り、触手が伸びていく。頭部に巨大な花弁を開き、塊は金切り声に近い咆哮をあげた。

「あれは、町を襲つた・・・?」

ローズが叫ぶ。無数の植物の怪人たちは根に似た両脚を動かして、体を少し左右させる動きで歩き、ふたりとの距離を縮めていく。アクアは由羅に自分の想いが届かなかつたことを悲痛極まりなく感じながらも、ローズと背中を合わせ、臨戦態勢を取つた。

しかし、何分数が多い。町を襲つた者の数倍はある数にアクアもローズも構えを取るも額から汗が流れていた。

「全部・・・全部壊せええええっ!!」

もはや何もかも捨ててヤケクソにも見える由羅が絶叫する。声に応じて怪人たちは触手をさらし、一斉に走り出した。アクアもローズも「はあっ!」と声をあげて戦闘に入ろうとした。

ビュッ、と巨大な何かがふたりの目の前を横切つた。「ロプーッ!」の声とともに。

「突然」に、アクアとローズが驚くと、ふたりの前に四つの人影が降り立った。ふたりは驚き、瞬時に歓声をあげた。

「みんな！」

ふたりの視界に入ったのは、キュアドリーム。
彼女を中心とする四人のプリキュアだった。

絆

「アクア、ローズ、お待たせ！」

「間に合ってよかったです！」

ドリームとレモネードが笑顔で声をかけた。ルージュとミントも微笑でふたりに振り返っている。

「でも、どうしてここが？」

「メルポのおかげロプ」

ローズが質問すると、巨鳥姿のシロツプが翼を広げてゆっくりと傍らに降下する。速くて一瞬分からなかったが、「ロプーッ！」の声からして先ほどふたりの前を横切ったのはみんなを背中に乗せたシロツプだったんだなと理解できた。シロツプが煙を発して巨鳥からもとの妖精の姿に戻る。同様に妖精の姿でいるココとナッツの後ろからちよこんと、彼の親友のメルポが出てくるのを確認してシロツプは話を続けた。

「のぞみがふたりへの手紙をメルポに託したんだロプ。メルポは手紙に託した思いから届けたい人がいる場所を辿る力があるから、その力を頼りにしてここまで来たんだロプ。前にふたりがエターナルにさらわれた時と同じ方法ロプ」

そういえば、私とくるみが「浦島太郎の世界」に迷い込んだ時、みんなはそうやって助けに来てくれたんだっけ？

アクアがそう記憶を反芻はんすうさせていると、「メー！」とメルポが液晶画面のような顔を光らせて手紙を一通、取り出した。アクアは封を破り、ローズとともに中身を見る。

『かれんさん　くるみ　ゼツタイゼツタイ助けに行くからね！』

大きく、のぞみの字で書かれていた。前回の時とほぼ同じ内容だが、

最後の一体を、アクアは手刀で撃ち砕いた。そして、静かに一定方向に視線を向ける。

王海由羅が立っていた。その目は誰も見ていなかった。最愛の親友である「水無月かれん」さえも。

その瞳に籠っているのは、親友にさえも拒絶された喪失感による「絶望」と、全てを投げやりになかない激情に満ちた「憎悪」。

「許さない・・・っ！」

再び由羅の霊気が上がった。さっきよりも激しく、凄まじく。

花畑全体が大きく揺れた。立っていられない。

由羅の周囲が次々に盛り上がり、巨大なツタが現れた。ツタは由羅の全身を呑み込み、彼女の姿を消していく。ツタは互いと互いに先端を結び、体を形成する。その様子をプリキュアたちは愕然と見ているしかなかった。やがて10メートルを超える巨体の頭部と思われる部位に一輪の巨大な桔梗の花が咲き誇った。直後に咆哮が空間を激しく震わす。

「あ・・・あれは!?!」

「大きすぎるココー!」

さらに狂暴、さらに凶悪に豹変した巨大植物の怪物モンスターの威容に、ナツとココが恐怖する。プリキュアたちは揺れで崩した身体を立て、怪物を見上げながら、構えを取った。だが、さすがに今度は相手の桁違いな巨体に、顔色からわずかに恐怖が窺える。

「許さない・・・許さない・・・みんな・・・みんな・・・壊れるっ

っ!

怪物の中から憎しみに満ちた由羅の声が聞こえる。

直後、怪物は巨大な触手を振り下ろした。

終止符（前書き）

ファウストKさん、ありがとうございます。

終止符

全員跳び、触手を回避した。直後に叩き込まれた触手が粉塵を起こし、花畑を揺らす。アクアは着地すると、息もできないくらい胸が詰まった想いで怪物と化した親友を見上げた。

「由羅……」

今や、彼女は人間をも捨て、本能だけで暴れる醜い化け物に完全に変貌を遂げている。孤独から自分を救ってくれた親友の面影はそこになかった。

全て、自分のせい……なのか。

自分が親友のことを忘れなければ、彼女は悪霊にもならなかったし、暴走することもなかったのか。

後悔が、胸を押し潰す。

だが、すでにこのような事態を迎えた今、誰が悪いかどうか言うっても無意味だ。

過去よりも現在。

現在よりも未来。

起きてしまった事態を、自分は伝説の戦士プリキュアとして、収拾しなければならぬ責務がある。即ち、親友を倒す、という責務が。

このうえないほど苦しく、悲しい。けれど。

「……きゃああああああああああつっつっつっつ！！

！……」

触手に殴られ、大切な仲間たちが吹き飛ばされる。最愛の人も。

「ローズ！」

叫んだ直後、アクアも怪物の触手に全身を殴打された。

もはや、由羅は大好きだったキュアアクアさえも「敵」と認識していた。

完全に人間を捨てていた。

けれども、それはアクアも同じ。

たとえ昔の親友でも、仲間を傷つけるのは許さない。

誰よりも人を思いやり、優しい心を持つ彼女は、仲間が傷つけられた時点でかつての親友を倒すべき「敵」と判断した。

できれば、救いたかった。

できれば、分かってほしかった。

だけど、もう届かない。

せめてもの償いとして、アクアは自分の手で親友を葬ることを決意した。

「みんな、こうなったらレインボーローズ・エクスプロージョンで・

・」

「待って、ドリーム。みんな、お願いがあるの」

「アクア・・・？」

ローズが不思議そうに見ると、アクアは静かに怪物を見上げながら凜と、強い眼差しで言った。

「みんなのキュアフルーレを、私に託してほしいの」

「……………えっ……………」

「お願い。由羅は私の親友だった。だから、私の手で眠らせてあげたいの……………」

「……………」

全員沈黙した。けれども。

「……………分かった」

暫時後、ドリームがうなずいた。ルージュもレモネードもミントも同様の行為を取った。

「アクア、私も力を貸すわ」

「ありがとう、ローズ」

アクアは礼を言うと、再び怪物を見やった。全体からおぞましい邪気を発しながら、怪物は再度咆哮を轟かせた。

「プリキュアに、力を！」

「ミルキイローズに力を！」

大好きだった親友と一緒に。
閃光が花畑を覆い尽くした。

暁

桔梗の花畑は、再び静寂に包まれた。

怪物は消滅し、その跡には王海由羅が仰向けの状態のまま、倒れていた。

「由羅……」

アクアをはじめ、全員が彼女に歩み寄る。宙を見つめている由羅の瞳はぴくりとも動かなかった。

「由羅……教えて。どうして、こんなことをしようとしたの？」

「……これが『答え』だよ、かれんちゃん」

由羅は宙を見つめたまま、右手をほんの少しだけ挙げた。右手は半透明になっていた。全員、息を呑んだ。

「由羅、あなたまさか……」

「そうだよ。由羅はね、時間がなかったの。この世界にいる時間が……」

幽霊になってから、由羅は最初「死んだ」感覚がなかった。自分の死が理解できなかったから天に召されなかった。だから家族からも、親戚からも、最愛の親友からも気づいてもらえず、十年も寂しさに耐えながらずっとこの世に「存在」していた。

その間、彼女は父と母に会いに行こうとした。しかし、できなかった。死後、両親は娘と過ごした屋敷を捨て、何処かへと去っていった。由羅はあきらめずに両親の行方を捜したが、十年経った今も父と母の行方は知れない。だから、彼女は両親の次に好きだったかれんに会いに行ったのだ。

だが、たった一人にして最愛の親友だったかれんは自分との記憶を封印していた。親友のことを少しも思い出さないかれんを、由羅は遠くから悲しげに見つめていた。けれど、それでも由羅は幸せだった。話ができなくても、触れることができなくても、一番の親友のそばにただ彼女が寂しくなかつたし、日々成長していくか

れんの姿を見ているだけで心が満たされていた。・・・心が徐々に満たされなくなったのは、かれんが伝説の戦士プリキュアに選ばれ、その際に多くの親友ができ始めた頃だった。

「本当は分かっていたよ。かれんちゃんは昔と違うんだって・・・友達ができ寂しくなくなったんだって」

本来なら、由羅は彼女の幸福を祝いたかった。

だが、彼女が多くの親友とともに笑い合うのを見る度に心が痛んだ。分かっているにも、痛みは抑え切れなかった。極めつけとなったのが、美々野くるみの登場だった。親友どころか実の姉妹のように仲良くなっていふなりに、由羅は嫉妬と、危機感を募らせていった。

このままじゃ、かれんちゃんの中で「由羅」が本当に死んじゃう・・・！

そして、それを暗示するかのように、突然由羅の身体の至る部分が透き通り始めた。彼女は焦り、消えるのを全力で拒絶した。まだ逝きたくなかった。せめてかれんの中にまだいるはずの「由羅」を目覚めさせてから消えたかった。

なんとか成仏を免れた由羅はわずかしかない時間を通してかれんに会いに行くために、ついでにかれんと仲良くしているお友達をちよつと懲らしめるために負の力マイナスに手を伸ばした。悪魔に魂を売った由羅は15歳くらいの、生きた人間と話すことも触れることも可能となる身体と、怪物を生み、思うように操る邪悪の力を得た。

当初、由羅はかれんに会い、彼女が自分のことを思い出してくればそれで満足なはずだった。ところが、由羅にとつてどうしようもない誤算が起きてしまった。かれんと徐々に再会した由羅に、「かれんを自分のものになりたい」という強い独占欲が生まれたのだ。

よくある怪談話に死んだ友達の幽霊が生きている友達をあの世に連れて行くこうというのがあって、だけどその幽霊は偽者で本当の友達ならそんなことはない、最後には綺麗にまとめられることがあるが、それはあくまでも偽善であり、美談だ。本当に欲しいもの

はどんな手段を取ってでも自分のものにしたいと執着する。それが人間の本性であり、由羅は実にこのタイプにあてはまる人間らしい悪霊だった。

けれど、かれんは自分を拒否した。

「王海由羅」という過去の亡霊よりも「美々野くるみ」という最愛の人を選んだ。

本当は自分のほうが勝手に、こどもで、我侫^{わがまま}だと分かっていた。でも、仕方ないじゃない。由羅は本当は「こども」なんだもの。どんなに手を伸ばしても届かない人がさらに遠くに行ってしまうように。

怖くて、悲しくて……。

「かれんちゃんも、壊してやるって思ったんだ!!」

「……!!……」「」「」「」

涙を堪えた由羅の叫びは、全員の胸をえぐった。みな、ただただ立ち尽くすしかできなかった。言葉も、何も浮かんでこない。十年間も孤独に苦しんでもなお救われないこの悲しい少女を、一体何が救えるというのか。きつと、どんな言葉も慰めも、少女の絶望に呑み込まれてしまうだろう。

その時が、迫っていた。

由羅の全身が少しずつ、透明になっていく。少女の身体が完全に消えるまで一分もかからないだろう。それでも、アクアは半透明になっっている彼女の右手をしっかりと？んで叫んだ。

「由羅！約束するわ。もう、あなたのこと、絶対に忘れない。たとえこれから先、どんなことがあったって、絶対に忘れないわ！もう、私にはそれだけしかあなたにしてやれないから……」

アクアも泣いていた。必死の想いを込めて由羅に伝えた。アクアの想いが今度こそ届いたのかどうか分からないが、由羅は

「……うん、かれんちゃん」

と弱々しく呟いて、その場にいる全員に微笑んで……消えた。

無数の桔梗の花が、風に揺れた。

王海由羅は消えた。怪物にまで変貌してしまう悪霊の魂が、はたして天国に召されたのか、それとも地獄に案内されたのかは分からない。だけど、全員の心に、由羅のせつない想いが流れ込んでいた。寂しい。寂しい。

忘れないでほしい。

消えたくない。

みな、黙ったまま、涙を流していた。最後に見せた由羅の微笑が思い返される。最後の最後で彼女の魂は救われたのだと信じたい。アクアかれんは両手を合わせ、目を閉じ、由羅への祈りを捧げる。ローズくろも隣で静かに祈りを捧げた。

「由羅・・・もつと・・・もつと思いで出して。あなたの中の綺麗な想い。優しい想い。それを忘れないでいて・・・」

神様、もし存在するのであれば、この悲しき少女の魂を安らかに眠らせてあげてください。

少女は、本当は何も悪くないのです。

十年もの「孤独」という地獄を嫌というほど味わった今、これ以上少女を苦しめないでください。

どうか、少女を苦しみからお救いください。

どうか、お救いください・・・。

涙が溢れ、止まらないアクアかれんの身体を、ローズくろみは後ろからそっと抱き締めた。彼女もその背中に寄り添って泣いていた。声もなく、ただ静かに泣き続けるふたりを、みなはただ見つめていた。

いつの間にか、夜は明け、空は綺麗な青みを帯びて、穏やかな空気が戻ってきていた。

陽が、地平線から出ようとしていた。

エピソード

数日後、かれんはくるみとともに王海由羅と再会したあの神社に向いた。

石段を登り、境内に入る。シャベルで時代樹の根元を掘り始めた。ザクツ。ザクツ。

「本当にここに埋めたの？かれん」
ザクツ。ザクツ。

「記憶が正しければ、この時代樹は今も昔も変わってなかったから、間違いないはずだわ」

ガチンツ、と反応があり、土の中からアルミ製のミニバケツが見える。くるみは両手でそれを地上へと引っ張り上げた。

「結構、錆びてるわね」

「なんとしても開けるわよ」

ふたりの力を以て、あの手この手で蓋を開こうとする。約30分して、ようやく手応えが出た。

「もう少し・・・！」

力を込め、遂に蓋が開く。中を覗いた。

「うわあ、これかれんの小さい頃の写真じゃない。隣にいるのはかれんのお父さんとお母さんね！」

中に入っていた一枚の写真を取り出し、くるみは小さく歓声をあげた。海を背景に、まだ幼いかれんが両親とともに微笑んでいる。

バケツは錆びていたが、写真は状態が良く、鮮やかに色彩が出ている。

「そして、これは・・・楽譜ね。へえ、かれんって、この頃からモーツァルト弾いてたんだ。さすがは御両親が演奏旅行に行ってることだけはあるわね、かれん・・・・・・かれん？」

かれんはバケツに入っていたもう一つの中身を手にとって、眺めていた。言うまでもなく、王海由羅が埋めたものだった。

彼女が埋めた物は二つ。

一つは、写真。五歳のかれんと由羅が笑顔で仲良くピースしている。

もう一つは、桔梗の花。ただし、造花らしく、十年経った今も、花は瑞々しく咲いている。

花言葉は、「変わらぬ愛」。

「・・」

かれんは、由羅を思い返した。

死んだことが理解できず、十年もの孤独に最愛の親友への独占欲だけを支えに耐え、悪霊となってでも未練を果たそうとし、かれんに会いに来た少女。彼女は、ようやく理解してくれて、天に召されただろうか。実のところ、本当に彼女は幽霊だったのだろうかとかれんはほんの少しだけ疑問に思う。

あれは王海由羅という人の想いが形を成したのではなく、亡くなった彼女が手塩をかけて育てた桔梗の花が彼女の想いを受け継いで、由羅の姿を実現化させた花の妖あやかし・・・花妖かようだったのではないだろうか。

花に愛情を注いでいた由羅のかれんへの想いを自然に引き継ぎ、親友の存在を忘れてしまったかれんに亡くなった彼女の想いを伝え、記憶を蘇らせるべく、桔梗の花たちは死んだ「王海由羅」を復活させたのではないだろうか。突飛な発想だし、今となってはそんなこと確かめる術すべもないけれど。けれども、かれんはそうであってほしいと願う。彼女の想いだけが未練を残して地上に留まったが、彼女自身は安らかに成仏してほしい。

同様に、くるみも由羅のことを思い返す。この世界に存在する制限が迫っていたとはいえ、残されたわずかな時間を駆使し、自分の想いを最愛の親友に伝えた少女。結局憎悪が極限にまで達し、暴走してしまっただが、いつ消えてしまいかも分からず、彼女は相当焦っていたのだらう。すでに死んでいるにも関わらず、彼女は決死の状

態で行動していたのだ。必死、ではなく。

だとすれば、なんて強い。

強い少女ひつこだったのだろう。

自分には真似できないくらい、強い。

完敗だ、とくるみは認めた。

それでも、とくるみは思う。最後の最後に自分にも見せてくれた

彼女の微笑。あの優しい微笑。

もしあの時彼女にかれんからの想いが届いていたのなら、黄泉の国から自分とかれんがこれからも支え合って生きていくのを許し、見守っていてくれるだろうか。それは分からない。

だけど、これだけは約束しよう。自分も、由羅のことを忘れないと。そして、彼女が未練を残さないように、自分が責任を持ってかれんを守っていこう。最愛の人を泣かせないために。

これから何が起こってくるか分からない。だけど、愛する人を守るために、自分たちはこれからも支え合って、未来に突き進んでいく。

それだけは何があっても、絶対に変わらない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう決心を固めた後、かれんは少しだけ泣いた。

くるみは両手を広げて、そっと、かれんを抱き締めた。

これからの未来のために、愛する人を守っていくために、自分たちは何ができるのだろうか。

ああ、でも・・・・・・・・今は何も考えられない。ただ互いに支えて乗り越えていくしかない。

苦しいことも。悲しいことも。

それぐらい、何もなかったかのように。

涙を拭き、かれんは、くるみは、顔を上げた。

空は、今日も、青く澄み切っている。

もうすぐ夏が、終わろうとしていた。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8055v/>

花妖 ~ 蒼い追憶 ~

2011年10月19日03時16分発行